

上記の年代値から、秋津遺跡で確定した水走型の凸帯文土器の時期の下限、及び水走遺跡の凸帯文土器の長原式と弥生時代前期最古の土器から得られた放射性炭素年代は、2540～2490 BP 台の範疇に収まる状況を確認できる。今回の試料 No.1 の土器付着炭化物の ^{14}C 年代は 2445 ± 20 BP であり、上記の年代値よりもやや新しい。さらに、上述の河内平野での弥生時代前期の土器付着炭化物の年代値もふまえると、試料 No.1 の年代値は弥生時代前期と評価できる。

試料 No.2 の年代値 弥生時代前期後葉～中期初頭の年代値については、大和第Ⅱ-1 様式の ^{14}C 年代が 2330～2300 BP を中心にまとまるという測定結果がある（岡田・金原，2022）。さらに、大和第Ⅱ-1 様式の暦年代の定点として、BC 379 ないし BC 380 という酸素同位体比年輪年代も示されている。また、兵庫県下の弥生時代の放射性炭素年代値を検討した荒木（2022）の研究によると、弥生前期新段階（Ⅰ-3 期）で 2435^{14}C BP 台、弥生中期前葉（Ⅱ期）で $2273 \sim 2228^{14}\text{C}$ BP 台の ^{14}C 年代が示されている。

上記の研究事例にもとづく、 2305 ± 20 BP の ^{14}C 年代を示している今回の 127 土坑の最下層の試料 No.2 は、弥生時代前期の年代値と判断できる。

引用・参考文献

- 荒木幸治（2022）炭素 14 年代を用いた弥生土器編年の検証—兵庫県と岡山県の事例から—。赤穂市教育委員会，有年考古，9，68-95.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 小林謙一（2014）弥生移行期における土器使用状況からみた生業。国立歴史民俗博物館研究報，185，283-347.
- 小林謙一（2017）縄紋時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—。263p，同成社。
- 宮本一夫（2022）弥生時代の始まりと年代。日本考古学協会 2022 年度大会研究発表要旨，6-7，日本考古学協会。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会。
- 中尾智行・山根 航編（2009）讚良郡条里遺跡 Ⅷ 本文編。504p，大阪府文化財センター。
- 西本豊弘編（2006）新弥生時代のはじまり 第 1 巻 弥生時代の新年代。143p，雄山閣。
- 岡田憲一・金原正明（2022）中西遺跡・秋津遺跡の弥生時代前期水田遺構の変遷とその特質。考古学論攷，23-38.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
- 吉田邦夫（2012）古食性分析〈縄文人の食卓〉。吉田邦夫編「アルケオメトリア：考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る」：44-55，東京大学総合博物館。

第3節 炭素・窒素安定同位体比分析

1. 試料及び方法

試料は、126 土坑から出土した土器の外表面より採取した付着炭化物 1 点（試料 No.1）である。

測定を実施するにあたり、試料に対して、超音波洗浄、アセトン洗浄及び酸・アルカリ・酸洗浄（HCl:1.2mol/L, NaOH:1.0mol/L）を施し、試料以外の不純物を除去した。炭素含有量及び窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）である Flash EA1112（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ ）及び窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ ）の測定には、質量分析計 DELTA V（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比には IAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比には IAEA N1 を使用した。

測定は、次の手順で行なった。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA 内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで CO_2 と N_2 を分離し、TCD でそれぞれ検出・定量を行なう。この時の炉及び分離カラムの温度は、燃焼炉温度 1000°C 、還元炉温度 680°C 、分離カラム温度 35°C である。分離した CO_2 及び N_2 はそのまま He キャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいて C/N 比を算出した。

2. 結果

表 4 に、試料情報と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N 比を示す。図 69 には炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、図 70 には炭素安定同位体比と C/N 比の関係を示した。

図 69 において、土器付着炭化物（試料 No.1）は C_3 植物よりも窒素安定同位体比が高い位置にプロットされた。

図 70 において、土器付着炭化物（試料 No.1）は土壌（黒色土）の位置にプロットされた。

3. 考察

試料 No.1 の土器付着炭化物は、図 69 で C_3 植物よりも窒素安定同位体比が高い位置、図 70 で土壌（黒色土）の位置にプロットされ、土壌の影響や海産物を含んでいる可能性、あるいは淡水魚を含んでいる可能性も考えられるが、外表面付着の炭化物である点を考慮すると、主に C_3 植物（燃料材）に由来する炭化物と推定される。

表 4 結果一覧

試料番号	試料情報	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N 比 (モル比)
No.1	地区：15-2a 遺構：126 土坑 遺物 No.421 実測 No.154 種類：土器付着炭化物 採取箇所：外面	-26.2	11.9	9.19	0.425	25.2

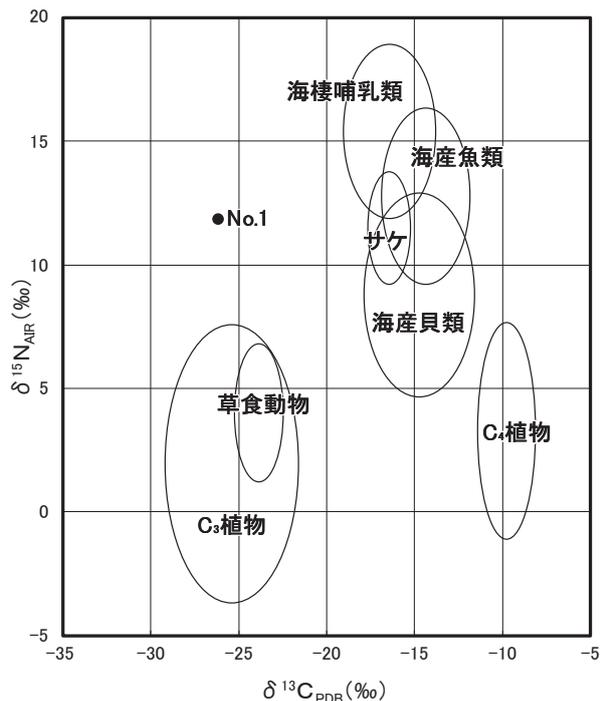


図 69 炭素・窒素安定同位体比

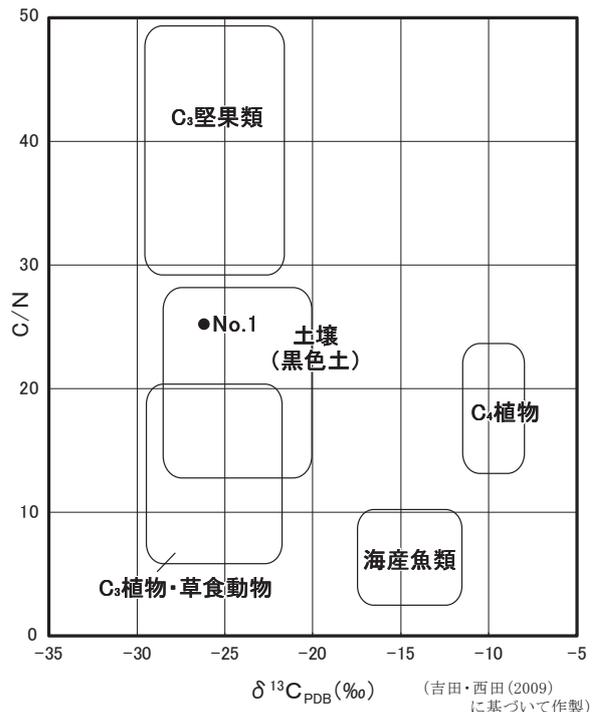


図 70 炭素安定同位体比と C/N 比の関係

引用・参考文献

赤澤 威・南川雅男 (1989) 炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元. 田中 琢・佐原 真編

「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」: 132-143, クハプロ.

坂本 稔 (2007) 安定同位体比に基づく土器付着物の分析. 国立歴史民俗博物館研究報告, 137, 305-315.

米田 穰 (2008) 丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析. 豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」: 261-263, 豊田市教育委員会.

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon, 44(2), 549-557.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子 (2007) 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究.

平成 16-18 年度科学研究補助金基礎研究 B (課題番号 16300290) 研究報告書研究代表者西田泰民

「日本における稲作以前の主食植物の研究」: 85-95.

吉田邦夫・西田泰民 (2009) 考古科学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火炎土器の国 新潟」: 87-99, 新潟日報事業社.

第4節 植物珪酸体分析

1. 試料と分析方法

分析試料は、127 土坑の下層埋土 (2.5GY5/1 オリーブ灰シルト (細粒砂含む)) 1 点である。植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行なった。

- 1) 試料を 105℃ で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加 (0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行なった。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重) を乗じて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。

2. 結果

(1) 分類群

産出した植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行ない、その結果を表 5・図 71 に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を写真 7 に示す。なお、植物珪酸体の生産量は植物種によって差異があることから、検出密度の評価は分類群によって異なる。参考までに、植物珪酸体群集の占有状況を比較するために、植物体生産量 (推定) を算出した。

[イネ科] キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型

[イネ科-タケ亜科] メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマ

表 5 植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)		地点・試料	127 土坑
分類群	学名		6
イネ科	Gramineae		
キビ族型	Paniceae type		6
ヨシ属	Phragmites		6
ススキ属型	Miscanthus type		6
ウシクサ族型	Andropogoneae type		6
タケ亜科	Bambusoideae		
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		23
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa		34
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		6
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		6
その他	Others		46
その他のイネ科	Others		
未分類等	Others		103
樹木起源	Arboreal		
ブナ科シイ属	Castanopsis		6
海綿骨針	Sponge		6
総数	Total		248
おもな分類群の推定生産量 (単位: $\text{kg} / \text{m}^2 \cdot \text{cm}$)			
ヨシ属	Phragmites		0.38
ススキ属型	Miscanthus type		0.07
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		0.27
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa		0.16
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		0.05
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		0.02

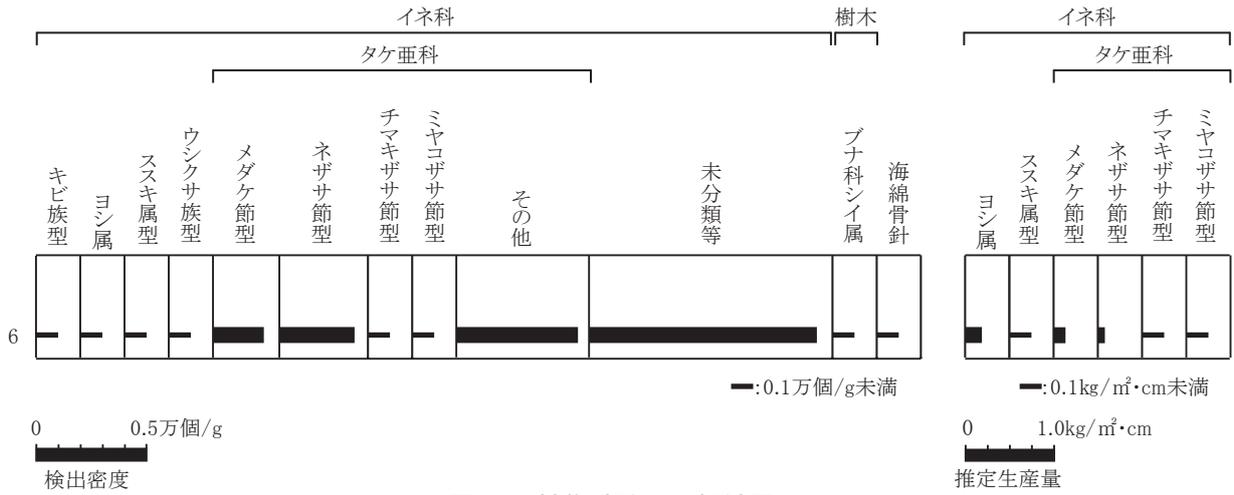


図 71 植物珪酸体分析結果

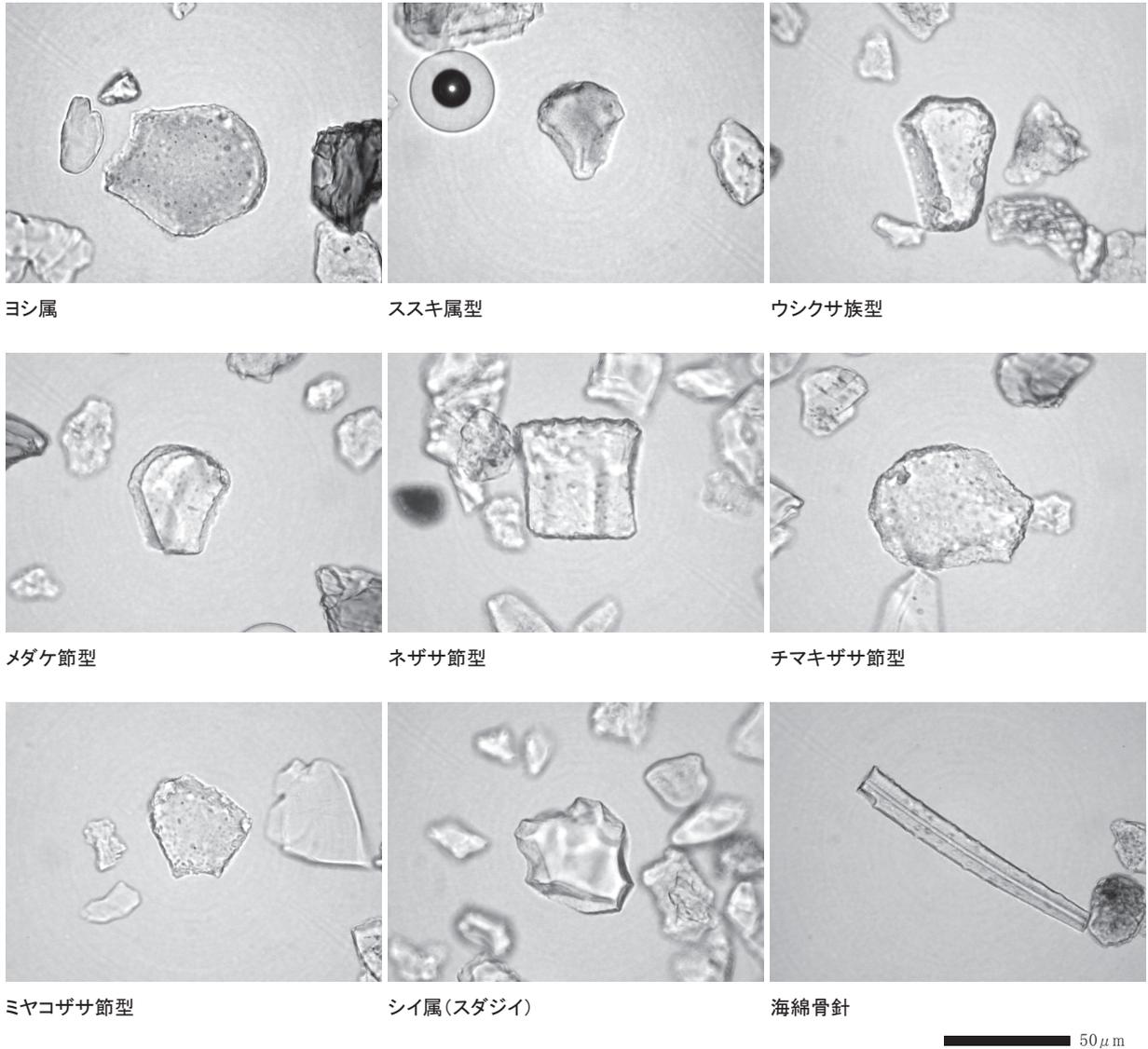


写真 7 植物珪酸体写真

ザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、その他

[イネ科-その他] 未分類等 [樹木起源] ブナ科シイ属 [その他] 海綿骨針

(2) 植物珪酸体の検出状況

127 土坑の埋土下層では、植物珪酸体の産出量はやや少ない。その中において、タケ亜科のネザサ節型とメダケ節型がやや多く認められる。他には、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも低い密度である。樹木では、照葉樹のブナ科(シイ属)が少量認められた。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある(杉山, 1999)。なお、樹木では植物珪酸体が形成される樹種は限られており、落葉樹では形成されないものも多い(近藤・佐瀬, 1986)。植物珪酸体以外に、少量であるが海綿骨針が認められた。

3. 考察

127 土坑の埋土下層では、植物珪酸体含有量がやや少ないことから、堆積当時の調査地近辺は、イネ科草本植物の生育しにくい堆積環境であったか、堆積速度が速かった可能性が考えられる。

なお、ヨシ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。

植物珪酸体の産状をみると、産出量は少ないものの、メダケ節型やネザサ節型がやや優勢であり、他には、ススキ属型、ウシクサ族型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他のタケ亜科が認められる。一方、ヨシ属は少量でありマコモ属は産出しない。また、樹木もブナ科シイ属がわずかに産出するのみで、他の分類群は見られない。こうしたことから、当該層の堆積時の調査地は開けており、比較的乾いた環境であったと推定される。なお、イネが産出しないことから、調査地近傍においては稲作が営まれていた痕跡は確認できない。

4. まとめ

大県郡条里遺跡(その 10)における稲作の可能性と周辺植生を検討する目的で、植物珪酸体分析を行った。分析の対象となった 127 土坑の埋土下層は、植物珪酸体の産出量が少なく、当時の調査地近辺は、イネ科草本植物の生育しにくい堆積環境であったか、堆積速度が速かった可能性が考えられた。なお、メダケ節型やネザサ節型がやや優勢な状況から、調査地は開けており、比較的乾いた環境であったと推定された。また、稲作が行なわれていた痕跡は認められなかった。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-。考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 杉山真二(2000) 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p.189-213.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用-古代農耕追及のための基礎資料として-。考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第6章 総括

今回の調査の成果は、大きく3点ある。1点目は条里型地割の痕跡を検出したこと。2点目は円形周溝墓を検出したこと。3点目は土器や石器など縄文時代の遺物が多く出土したことである。

条里型地割 遺跡の周辺には、古代条里制に伴う碁盤目状の地割が現在でも良好に残っている。今回の調査では、溝や畦畔などその痕跡が11層下面まで検出できた。その下の12a層には、8世紀代の土師器・須恵器を多く含んでいるが、796年初鑄の隆平永寶が2点含まれていた。このことから、この地域における条里型

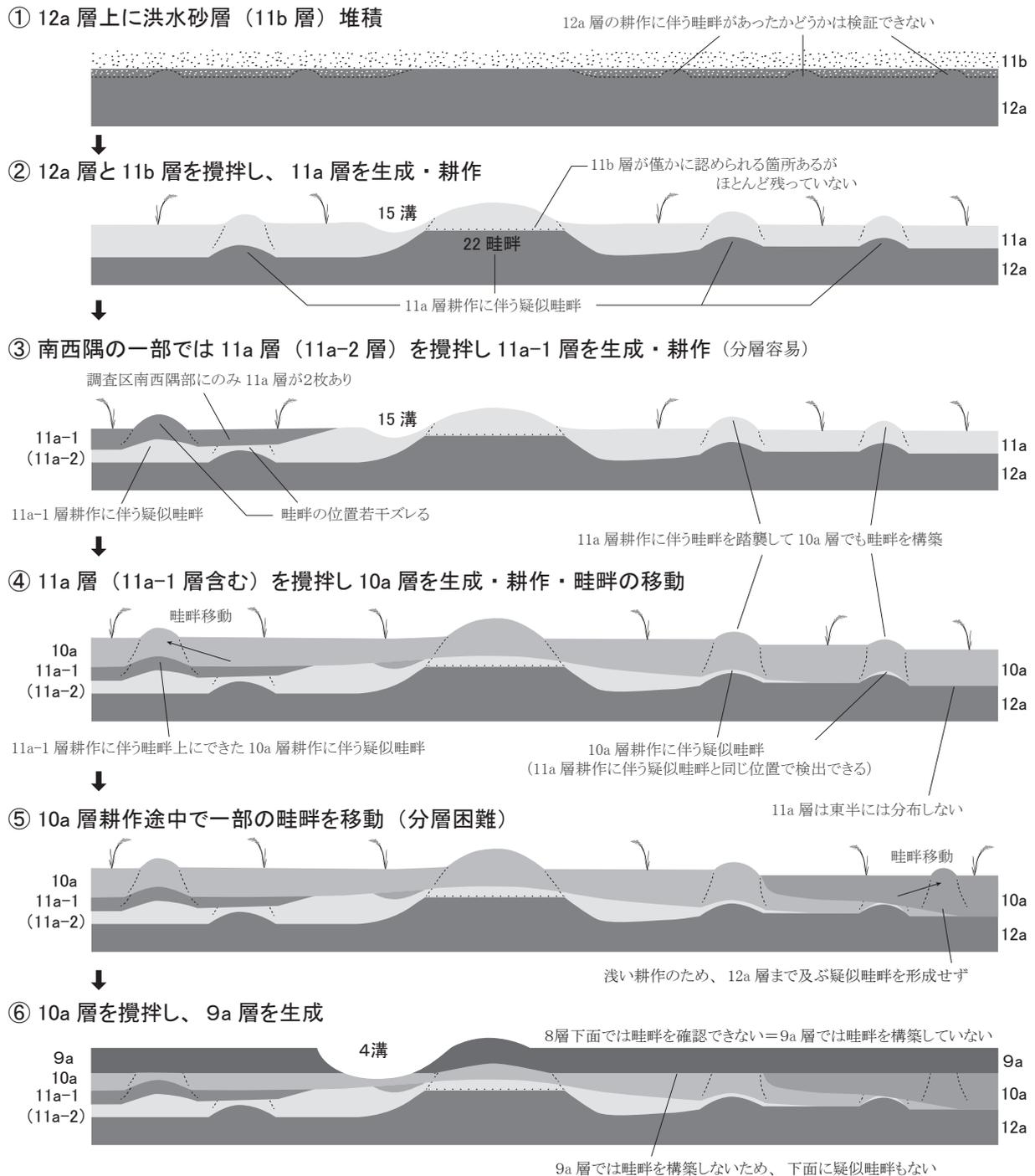


図 72 耕作土層の生成と畦畔の構築過程復原図

地割の施行は、おそらく8世紀には遡らないだろうと判断できる。僅かではあるが灰釉陶器や土師器での字状口縁皿なども出土していることから、古くても10世紀頃であったと考えている。畦畔は9層下面から11層下面で確認できたが、各面で検出したその痕跡が、実際の畦畔であったのか、疑似畦畔であったのか判断が難しいところがある。解釈に間違いがあるかもしれないが、どう畦畔が造られたのか、またそれが発掘調査でどうみえたのかについて、どう解釈したのかを交え簡単に記す。

まず12a層の上面を氾濫堆積層(11b層)が覆う。この両者を攪拌して11a層を生成し、畦畔を構築する。この時、12a層上面には11a層耕作に伴う疑似畦畔が形成される。11層下面で検出した畦畔はこれにあたる。なお、12a層の上面に12a層耕作に伴う畦畔があったのかどうかについては、西側に隣接する(そ

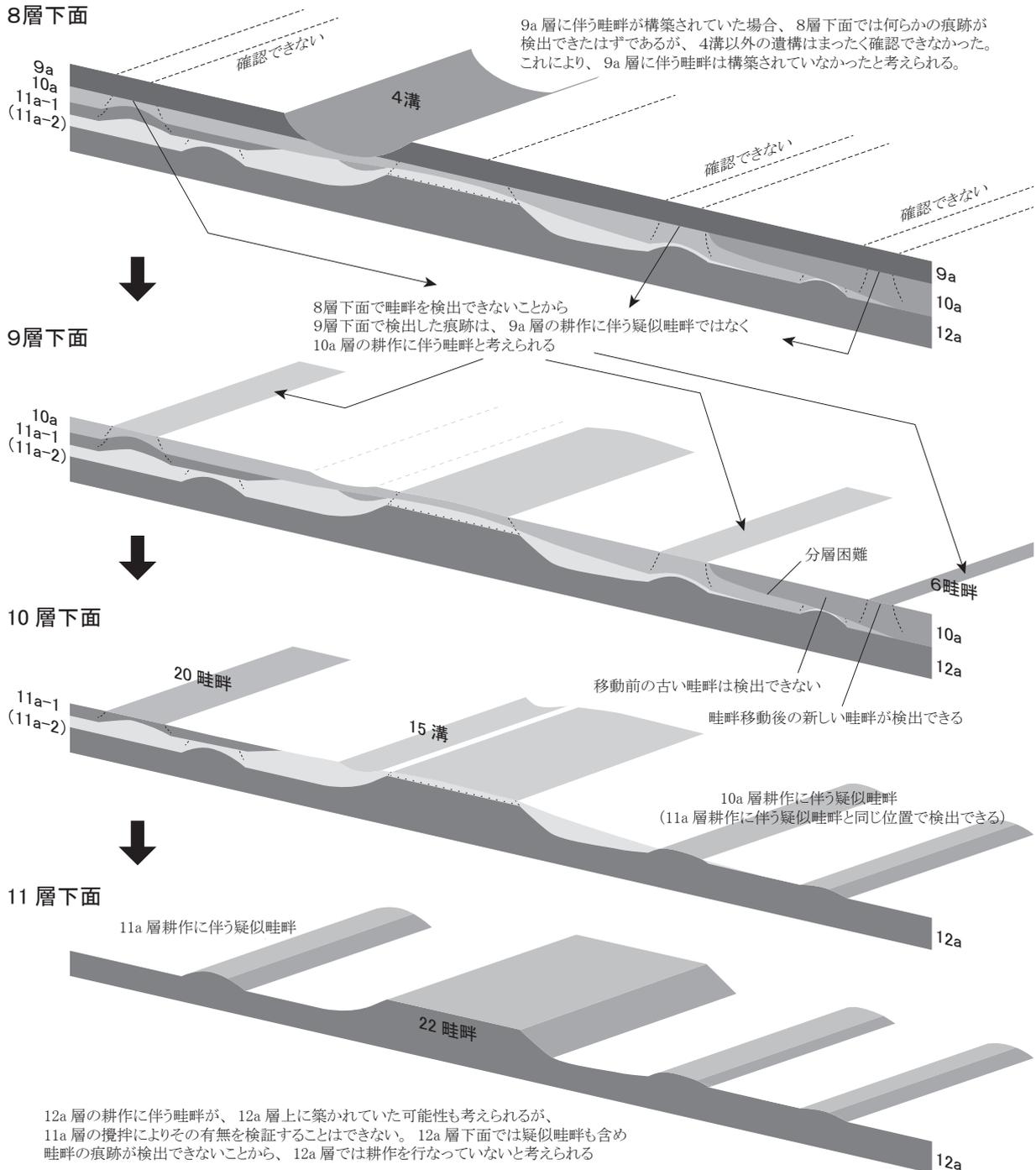


図 73 畦畔の見え方概念図

の9) 調査では、11b層が残っていたことから、一部の範囲で畦畔が確認されているようだが、今回の調査区内では、11b層が坪境畦畔(22 畦畔)の頂部にしか残っていないため検証できない。調査区南西隅の一部では、11a層を攪拌し直して11a-1層を生成し、それに伴い畦畔位置を僅かに移動させている。つづいてこれら11a層の深くまで攪拌して10a層が生成される。この攪拌により、調査区の東側約4分の3の範囲は、11a層がほぼ完全に10a層に取り込まれ、失われる。同時に11a層及び11a-1層耕作に伴う畦畔を踏襲して、同じ位置に畦畔が構築される。東半部の10層下面で検出した畦畔は、10a層の耕作に伴う畦畔下部にできた疑似畦畔であったと考えられるが、畦畔位置を踏襲していることから、11a層の耕作に伴う疑似畦畔が残っていた可能性も考えておきたい。なお、調査区南東隅の一部では、10a層の耕作途中に、12a層に疑似畦畔を形成しない程度の深さで再攪拌され、畦畔位置が若干南に移動されたと考えている。その後9a層の攪拌が全体に及ぶが、この9a層の上面では畦畔を確認できない。つまり9a層の攪拌に伴って畦畔は構築されていないと判断できる。当然9層下面にはその疑似畦畔が形成されることはないため、9層下面で検出した畦畔は、10a層の耕作に伴う畦畔と解釈することができる。最南の6畦畔のみ、10層下面検出の畦畔と僅かなずれが生じているのは、上記した畦畔の移動によるものと理解できる。

円形周溝墓 調査区北西隅で円形周溝墓(周溝墓10-1)を検出した。この西側に近接して、(その8)・(その9)調査でも方形周溝墓が3基検出されている(図74)。今回の周溝墓10-1も合わせた4基は、ほぼ同規模で、列状に配置されていることから、一連の周溝墓であったことが容易に推測できる。ただし周溝出土の遺物を見ると、(その8)調査の1号墓からは古墳時代前期(庄内式期後半～布留式期初頭)の遺物が出土しており、若干新しい時期の周溝墓と判断されている。今回の周溝墓10-1からは、(その9)調査の3・4号墓と同じ弥生時代後期後半の土器が出土しているが、やや浮いた位置から1号墓と同時期の甕も出土しており、1号墓築造の段階まで、周溝墓10-1は僅かに埋まる程度で、ほとんどその形状をとどめていたことがうかがえる。おそらく今回の周溝墓10-1と、(その9)調査の3・4号墓がほぼ同時期に築造され、1号墓が若干遅れて造られたのではないかと考えられる。また、この周溝墓10-1に伴い、東側に調査区を斜行する80溝を検出した。周溝墓と同時期の遺構はこの溝以东には全く分布しておらず、80溝が墓域の東側を限る施設であった可能性が高い。

ところで、円形周溝墓の検出例は、河内地域では少なく、摂津地域以西に多いが、今回の調査ではそれらの地域との関係を示すような遺物は出土しておらず、円形周溝墓のみを特徴付けるような遺物もみつっていない。墳丘の平面形以外、この円形周溝墓のみが特異な墓であったとは、今回の調査成果から読み取ることにはできない。本文中に記した滋賀県五村遺跡の円形周溝墓のように、突出して規模が大きいわけでもなく、むしろ、(その9)調査の3号墓出土の土器とよく似た土器片がみついているなど、ほかの方形周溝墓と何ら違いはなく、同階層の墓であった状況がうかがえる。

墳丘の平面形の違いが何に起因するものなのか、その解明のためにも、今後、河内地域における円形周溝墓の類例が蓄積されることを期待したい。

縄文時代の遺物 縄文土器や石器、また石棒など、これまでの調査でも何点か出土しており、周辺に縄文時代の集落の存在が推測されていた。今回の調査では、それらを凌駕する量の縄文時代の遺物が出土しており、また土偶や石棒など、縄文文化を特徴づける遺物が揃って出土するなど、明らかに縄文集落に限りなく近い部分の調査であったことがうかがえる。これらの遺物の多くは、上記80溝より東側から出土していることから、縄文集落の中心は、おそらく今回の調査区の東側に位置する山ノ井遺跡内であったと推定できる。今回検出した縄文時代の土坑や落込みなどは、その縁辺部の遺構と考えられる。なお、80溝は弥生時代後

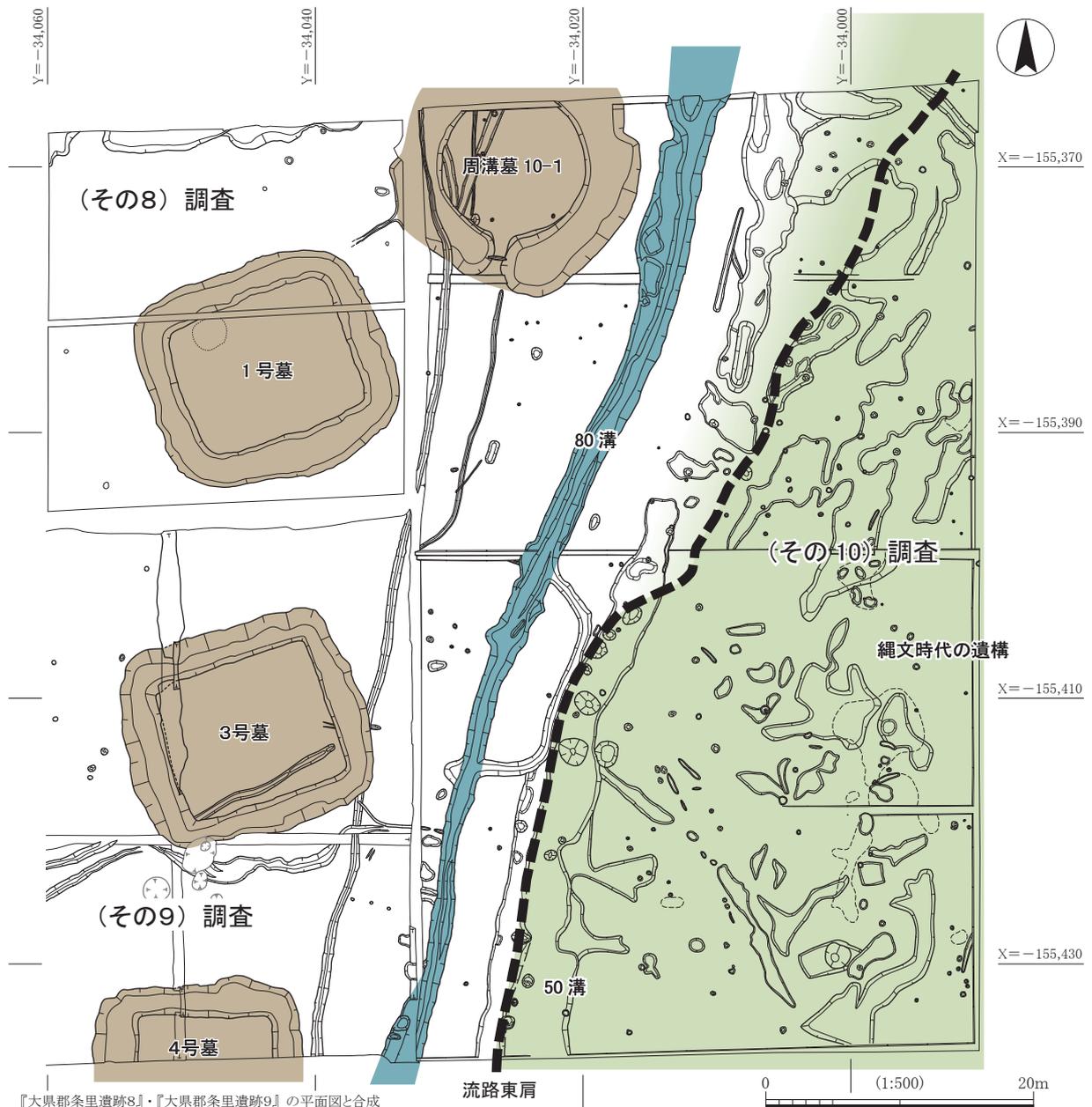


図 74 縄文時代から古墳時代の遺構分布

期後半に築かれた遺構であり、縄文時代の集落には伴わない。縄文集落の縁辺は、80 溝の東側に 4～5 m ほど隔てる 50 溝あたりであったと考えている。この 50 溝は、その下層に位置する排水流路の東肩部に形成された自然堤防状の砂の盛り上がり（写真図版 9-7・8）に影響されてできた遺構である。つまり、山ノ井遺跡内に展開していると考えられる縄文集落は、今回の調査区から（その 8）・（その 9）調査区にかけて検出した縄文時代晩期前葉とされる排水流路を西辺とし、その東側に広がっていたと考えられる。（伊藤）

以下、出土遺物についてもう少し詳しく記し、まとめとする。

凸帯文土器 調査区東半部で、多くの凸帯文土器が出土している。完存品はなく、ほとんどが小片であるため不明な点も多いが、おおよそ以下のことが明らかとなった。

①凸帯文が付く破片は、図化していないものも含めると約 350 点出土している。そのうち、浅鉢なども含めた口縁部凸帯のみの破片が約 190 点、2 条凸帯をもつ破片と胴部凸帯片が合わせて約 160 点（2 条凸帯片を除くと約 150 点）と、破片数に著しい差がない。これにより、器種は 2 条凸帯の深鉢が中

心であったことがうかがえる。

- ②その形状は、胴部凸帯から口縁端部に向けて内傾せず、まっすぐに立ち上がるものが多い。
- ③口縁部の凸帯は端部に貼り付けられており、上下にナデを施し、凸帯の断面が「▶」形になるものが多い。
- ④凸帯の刻目は小さいものが主で、小D字と小O字を呈するものが多い。
- ⑤底部は側面がわずかに張り出す程度の緩い屈曲をもつものが多い。

近畿地方の凸帯文土器については、これまで奈良盆地や河内平野出土の深鉢を中心に編年が構築されてきた。その後、精製の浅鉢による凸帯文1期から3期の広域編年案が示され、近年ではそれをさらに細分した「鬼塚型」→「口酒井型」→「船橋型」→「宮ノ下型」→「長原I型」→「長原H型」との型式学的組列が提示されている。

今回出土した縄文土器の特徴をこれらに当てはめてみると、家根氏の設定した長原式であり、泉氏の凸帯文3期にあたる。さらに詳しく岡田氏の変遷に重ねると、「船橋型」から「長原I型」が少なく、ほとんどが「長原H型」にあたっていることがわかる。また「水走型」と呼ばれるタイプもわずかに認めることができる。つまり、今回出土した縄文土器は、長原式の中でも新しい様相にまとまった良好な資料と評価できる。

遺跡の動態 近隣に点在する縄文時代の遺跡の中でも、当遺跡とのかかわりを考えるうえで重要と思われる遺跡に八尾市恩智遺跡がある。調査地から北へ約1kmに所在する遺跡で、晩期中葉頃の土器が特に多く出土しているが、船橋式から今回の調査で多く出土している長原式のもの、少量含まれる程度でほとんど出土していない。その後再び弥生時代前期の土器が多く出土していることから、縄文時代晩期末頃に、一旦集落を別の場所に移していた可能性が考えられる。今回の調査で出土した縄文土器は、上記のとおり恩智遺跡で出土量が減る長原式のもの主であるが、これまでに実施した西側の大県郡条里遺跡の調査では、滋賀里IV式の土器も出土していることから、晩期後葉頃に徐々に恩智遺跡から今回の調査地西側周辺に居住域の移動が始まり、晩期末になって本格的に調査地東側の山ノ井遺跡内へ集落を移した。また、今回の調査では弥生時代前期の土器がわずかしこ出土していないことから、弥生時代に入ると再び恩智遺跡に集落を戻したのではないかと考えている。

なお、恩智遺跡と大県郡条里遺跡の南東側に隣接する大県遺跡との関係について、恩智遺跡の調査報告書の中で「本調査地では縄文時代晩期前半の滋賀里I・II式の土器はほとんど出土しておらず、(中略)大県遺跡では滋賀里I・II式の土器が多量に出土しており、恩智遺跡で多量に出土した滋賀里III式の土器はほとんどみられない。恩智遺跡と大県遺跡は距離もあまり離れていないことから、縄文時代においてはこの両遺跡は補完関係にあったものと思われる。」とたいへん興味深い指摘がされている。山ノ井遺跡は、位置的にもこの恩智遺跡と大県遺跡のちょうど中間にあり、時期的にもその隙間を埋めるような遺物が出土していることから、周辺遺跡の動態を明らかにするうえで、恩智遺跡—大県遺跡という関係に新たに加えるべき非常に重要な遺跡であったと考えられる。今後は山ノ井遺跡を含めて、それぞれの関係を細かく検討していく必要がある。

サヌカイト製石器 計299点出土しており、そのうち、12層下面も含めた13層出土のものと、13層下面検出の遺構出土のものが合わせて201点と大半を占める。組成は、石鏃が24点、スクレイパーが11点、石錐の可能性のあるものが1点、石鏃の未製品が3点、剥片が141点、石核が33点、楔形石器が62点、二次加工のある剥片が20点、原礫が4点である。

石鏃は弥生時代のもので多く、縄文時代晩期のもものは少ない。ただし製品や未製品の全体に占める割合

は非常に少ない。石鏃以外の石器の帰属時期が問題ではあるものの、剥片が 141 点と多く、続いて楔形石器の出土数が多いこと、また石核や原礫も出土していることなどから、遺跡内で小規模な石器生産が行なわれていた可能性も十分考えられる。剥片については、1～3 cm 四方程度の小型のものが大半であり、製品を製作した際の残滓と考えられるが、凹基鏃やその未製品との法量に大差がないことから、その一部は凹基鏃など小型石鏃の製作に用いるための素材剥片であった可能性も考えておきたい。

なお、この時期に多くみられる香川県金山産サヌカイトは、今回の調査では可能性があるものが数点みられる程度で、ほとんど出土していない。

今回の調査で出土した凸帯文土器は、長原式の中でも新しい段階のものであり、器壁に付着した炭化物の年代測定では、これまで測定されてきた長原式の土器よりも若干新しい年代値も得られている（第 5 章）。これらの資料は、凸帯文土器の終焉と弥生時代への移行の問題や、「水走型」との関係、また上記のような集落の移動の問題、さらには集落内での生業などを考えるうえでも非常に有用な資料となる。今後、これらの資料が広く活用されることを希望する。

なお本書内では、縄文土器・石器について極簡単にまとめたが、更なる詳細な分類・分析が必要である。これについては稿を改め検討したい。 (田中・(伊藤))

引用・参考文献

- 1) 岡田茂弘 1965 「縄文文化の発展と地域制—近畿」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』、河出書房新社
家根祥多 1981 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究 第 4 巻 縄文土器Ⅱ』雄山閣
 - 2) 泉 拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第八集 奈良大学文学部文化財学科
 - 3) 岡田憲一 2014 「瀬戸内海東辺における凸帯文土器と遠賀川式土器」『第 25 回中四国縄文文化研究会 中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』第 25 回中四国縄文文化研究会事務局
2016 「「凸帯文」と「遠賀川」の接続—奈良県観音寺本馬遺跡出土凸帯文土器の評価—」『魂の考古学—豆谷和之さん追悼論文編—』豆谷和之さん追悼事業会
 - 4) 山本昭・泉本知秀・福岡澄男 1976 「八尾市恩智遺跡の出土遺物について」『大阪文化誌』第 2 巻 第 1 号
瓜生堂遺跡調査会 1980 『恩智遺跡』
八尾市教育委員会 1987 『八尾市内遺跡昭和 61 年度 発掘調査報告書 I—恩智遺跡の調査—』
関西縄文文化研究会 2007 『関西の突帯文土器 資料集』
 - 5) 公益財団法人 大阪府文化財センター 2015 『大県郡条里遺跡 2』、2021 『大県郡条里遺跡 6』、2023 『大県郡条里遺跡 9』
 - 6) 八尾市教育委員会 1987 『八尾市内遺跡昭和 61 年度 発掘調査報告書 I—恩智遺跡の調査—』
- ・公益財団法人 大阪府文化財センター 2015 『大県郡条里遺跡 2』、2022 『大県郡条里遺跡 8』
 - ・杉本厚典 2013 「河内地域の庄内式期・布留式期の墳墓について」『大阪歴史博物館研究紀要』第 11 号
 - ・財団法人 大阪市文化財協会 1982 『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』
 - ・上峯篤史 2018 『縄文石器 その視角と方法』京都大学学術出版会

表6 サヌカイト製石器計測表(掲載分)

挿図番号	遺構・層位	グリッド	器種	原礫面	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
113	10a層	11-2h	Ah		1.1	3.1	0.3	1.1	凸基
114	10a層最下層	11-3g	Ah		1.3	4.2	0.4	2.4	有茎
115	10a層最下層	11-3g	Ah		1.6	2.9	0.3	1.9	?
134	12a層	20I-10c	Ah		1.6	6.2	0.5	5.2	有茎
135	12a層	11-3i	Ah		1.3	4.1	0.4	2.1	有茎
136	12a層	11-3g	Ah		2.0	4.0	0.4	3.3	有茎
137	12a層	1J-2a	Ah		1.3	2.6	0.3	1.6	有茎
138	12a層	11-2j	Ah		1.2	3.4	0.7	2.9	凸基
139	12a層	11-2j	Ah		1.4	1.8	0.3	0.6	未製品
140	12a層	11-2j	Sc	○	2.4	5.2	1.0	9.6	
141	12a層	1J-3c	RF		2.3	3.0	1.0	6.5	
265	13a層下層	20J-10a	Ah	○	1.4	1.4	0.2	0.4	?
266	13a層	20J-10c	Sc	○	3.4	5.0	1.1	20.1	
267	13a層	1J-3a	Sc	○	3.5	6.4	0.9	23.7	
268	13a層	1J-2a	Sc	○	5.2	6.5	1.7	49.7	
269	13a層	1J-2c	PS		2.6	2.9	0.8	7.3	
271	13a層	1J-2d	Co	○	3.2	9.6	1.4	39.7	接合資料
270		1J-2d	Fl	○	3.8	3.8	0.6	13.4	
294		13a-1層	11-1h	Ah		1.3	3.9	0.5	
295	13a-1層	11-2i	Ah		1.6	4.9	0.5	3.5	有茎
296	13a-1層	11-1i	Ah		1.3	4.9	0.6	3.0	有茎
297	13a-1層	20I-10i	Ah		1.3	5.5	0.6	3.6	有茎
298	13a-1層	11-1i	Ah		2.0	5.5	0.7	6.5	有茎

寸法は、完存品・破片ともに残存最大値を示した

挿図番号	遺構・層位	グリッド	器種	原礫面	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
299	13a-1層	20I-10j	Ah		1.9	5.0	0.7	5.4	有茎
300	13a-1層	11-1j	Sc	○	4.3	4.7	1.9	35.6	
339	13a-2層	20I-10h	Ah		2.1	5.2	0.4	5.4	有茎
337	13a層下面	11-4i	Ah		1.2	1.3	0.2	0.4	凹基
338	13a層下面	1J-2d	Ah		1.7	3.9	0.3	25.4	平基
340	13a層下面	11-3i	PS	○	4.4	7.0	2.9	102.3	
349	150周溝	11-2g	Sc	○	3.3	5.2	0.7	13.4	
347	墳丘上	11-3h	Ah		1.6	3.1	0.5	2.4	有茎
346	墳丘上	11-3h	Ah		1.2	3.2	0.3	1.1	有茎
348	墳丘上	11-3g	Ah	○	1.3	3.7	0.4	1.7	有茎
175	23溝	11-2h	PS	○	4.9	5.8	1.7	65.7	
374	50溝	1J-3a	PS		5.2	6.1	2.5	107.2	
373	51溝	1J-1c	PS	○	2.3	4.8	1.1	15.1	
402	80溝	11-2h	Ah		1.2	3.2	0.3	1.3	凸基
403	80溝	11-2i	Sc	○	2.1	2.9	0.8	4.4	
404	80溝	11-2i	Sc	○	4.1	8.8	1.7	63.3	
406	153溝	11-1h	PS	○	3.2	3.7	1.4	19.2	
407	198溝	11-1h	Ah		1.6	1.9	0.3	1.0	凹基・未製品
417	126土坑	1J-2a	Ah		1.7	3.3	0.4	1.5	凹基・五角形
442	225土坑	20I-10g	Ah		3.1	5.7	0.9	17.3	未製品
461	200落込	11-1h	Dr?		1.3	2.6	0.3	1.0	

※ Ah:石鏃, Dr:石錐, Sc:スクレイパー, RF:二次加工のある剥片
PS:楔形石器, Co:石核, Fl:剥片

表7 サヌカイト製石器計測表(未掲載分)

番号	遺構・層位	グリッド	器種	原礫面	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	3a層	1J-1c	-	○	4.3	7.8	1.5	53.3	原礫
2	4a層	11-2j	Fl		1.5	1.8	0.2	0.6	
3	9a層	1J-2c	Fl		2.4	3.8	0.7	5.2	
4	9a層上面	1J-2c	Fl	○	3.5	4.3	1.2	17.9	
5	10a層	11-3h	Co		2.7	4.6	1.2	13.3	
6	10a層	11-3i	Co		6.3	8.7	1.9	104.0	
7	10a層	1J-3a	Fl		2.2	2.5	0.4	2.5	
8	10a層	11-3h	Fl		1.7	2.8	0.4	2.2	
9	10a層	11-2i	Fl		1.8	2.8	0.4	3.0	
10	10a層	11-2j	Fl		1.9	2.6	0.5	3.5	
11	10a層最下層	11-1g	Co		1.4	3.5	0.9	6.0	
12	10a層最下層	11-2h	Fl	○	1.4	4.1	0.5	4.3	
13	10a層最下層	11-2h	Fl		1.8	2.0	0.3	1.6	
14	10a層最下層	11-2h	Fl		1.4	1.6	0.3	1.1	
15	10a層最下層	11-2h	Fl	○	1.1	2.0	0.3	0.9	
16	10a層下面	1J-3b	Fl		1.9	2.9	0.3	3.0	
17	11a層	11-2j	PS		2.1	2.7	1.2	8.9	
18	11a層下面	11-3i	Fl	○	1.5	2.7	0.4	2.3	
19	12a層	11-1g	Co	○	4.3	5.5	1.3	41.6	
20	12a層	11-3g	Co	○	5.0	9.6	3.0	122.5	
21	12a層	20J-10a	Co	○	2.0	2.6	0.7	5.2	
22	12a層	11-2h	Co	○	3.2	4.9	1.3	20.2	
23	12a層	1J-3d	Fl	○	1.5	2.2	0.4	2.7	
24	12a層	1J-3b	Fl	○	2.3	5.0	0.6	5.8	
25	12a層	1J-3b	Fl	○	1.9	5.9	0.5	9.7	
26	12a層	1J-3a	Fl	○	1.2	2.9	0.3	1.8	
27	12a層	1J-3a	Fl		1.7	2.1	0.3	1.0	
28	12a層	1J-3a	Fl		1.3	2.2	0.2	0.9	
29	12a層	11-2g	Fl	○	1.5	1.7	0.4	1.2	
30	12a層	1J-2a	Fl	○	1.6	4.6	0.7	5.5	
31	12a層	11-3g	Fl	○	2.3	3.2	0.7	4.0	
32	12a層	11-1g	Fl	○	3.3	6.3	1.2	25.6	177と接合
33	12a層	11-1h	Fl	○	2.1	6.1	0.6	8.0	
34	12a層	11-2h	Fl	○	1.1	1.4	0.5	1.1	
35	12a層	11-3g	Fl		1.2	1.3	0.3	0.6	
36	12a層	11-3g	Fl		1.6	1.8	0.2	1.0	
37	12a層	11-3g	Fl		1.2	2.8	0.5	1.4	
38	12a層	11-3g	Fl		2.2	3.3	0.6	4.7	
39	12a層	11-3g	Fl	○	1.8	3.0	0.4	2.7	
40	12a層	11-3h	Fl		2.1	3.3	0.7	4.0	
41	12a層	11-3h	Fl		1.9	1.9	0.4	1.9	
42	12a層	11-3h	Fl		3.1	6.2	1.3	25.0	
43	12a層	11-3j	Fl	○	2.6	5.1	0.9	9.6	
44	12a層	11-3j	Fl	○	1.2	4.3	0.8	3.5	
45	12a層	11-3j	Fl	○	1.4	3.7	0.7	3.1	
46	12a層	11-4j	Fl		3.1	3.8	0.6	7.6	
47	12a層	11-3h	Fl	○	2.4	3.1	0.9	5.9	
48	12a層	11-3h	Fl		3.0	4.2	0.6	11.8	
49	12a層	11-2i	Fl	○	3.0	4.5	1.1	12.3	

番号	遺構・層位	グリッド	器種	原礫面	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
50	12a層	11-2j	Fl	○	2.5	3.2	0.8	5.9	
51	12a層	11-2j	Fl	○	1.5	3.6	0.6	4.0	
52	12a層	11-2j	Fl	○	2.3	2.6	1.3	5.0	
53	12a層	11-3i	Fl	○	2.2	2.7	0.7	4.6	
54	12a層	11-3i	Fl	○	2.0	2.2	0.4	1.6	
55	12a層	11-3i	Fl		1.4	2	0.2	0.5	
56	12a層	11-3i	Fl	○	2.6	2.9	0.6	3.9	
57	12a層	11-3i	Fl		1.2	1.6	0.1	0.3	
58	12a層	1J-3b	PS		2.9	2.7	0.6	5.5	
59	12a層	1J-2a	PS		2.5	2.3	0.7	3.2	
60	12a層	11-3g	PS	○	2.3	4.5	1.7	16.5	
61	12a層	11-2g	PS	○	2.5	3.9	1.2	13.3	
62	12a層	11-3g	PS		1.8	2.7	0.7	3.7	
63	12a層	11-3g	PS	○	3.1	2.1	0.5	4.3	
64	12a層	11-3h	PS		2.3	4.7	1.0	15.3	
65	12a層	11-3h	PS	○	3.1	6.2	1.3	9.1	
66	12a層	11-3j	PS		2.2	2.6	0.6	5.0	
67	12a層	11-2i	PS		3.6	1.7	0.9	6.0	
68	12a層	11-2j	PS		3.6	5	1.7	35.2	
69	12a層	11-3i	PS		2.3	4.1	0.9	7.8	
70	12a層	11-3i	PS		1.8	3.3	0.8	4.5	
71	12a層	11-3i	PS		2.9	2.4	0.4	4.0	
72	12a層	11-3g	RF	○	2.1	3.2	0.3	4.7	
73	12a層	1J-3b	Sc	○	3.6	6.3	1.1	21.1	
74	12a層下面	11-3g	Co	○	2.7	3.2	0.7	3.8	
75	12a層下面	11-3g	Fl	○	1.7	2.1	0.3	1.4	
76	12a層下面	11-3g	Fl	○	1.1	1.4	0.2	0.3	
77	12a層下面	11-1h	Fl	○	3.2	4.6	1.1	13.3	
78	12a層下面	11-2i	Fl		1.1	2.2	0.6	1.5	
79	12a層下面	11-1i	Fl	○	1.8	2.3	0.5	3.6	
80	12a層下面	11-2i	PS	○	2.1	2.4	0.5	3.2	
81	12a層下面	11-1i	PS	○	2.1	2.6	0.3	2.4	
82	12a層下面	11-3h	RF	○	2.2	2.4	0.2	1.8	
83	13a層	1J-3b	-	○	8.7	3.0	2.9	111.2	原礫
84	13a層	20J-10c	Co		2.7	6.9	0.5	11.5	
85	13a層	1J-3d	Co	○	4.8	8.3	3.1	114.3	
86	13a層	1J-3a	Co	○	4.1	7.5	1.4	51.7	
87	13a層	11-1d	Fl		1.9	6.1	0.6	7.4	
88	13a層	11-1j	Fl		2.1	2.0	0.4	1.9	
89	13a層	11-3i	Fl		1.8	1.8	0.2	0.8	
90	13a層	11-3j	Fl	○	2.2	4.3	0.6	10.3	
91	13a層	1J-2a	Fl		3.9	4.7	0.9	17.8	
92	13a層	1J-2d	Fl	○	4.7	7.4	1.6	48.9	
93	13a層	1J-3a	Fl	○	2.6	3.2	0.6	5.5	
94	13a層	1J-3b	Fl		1.9	2.5	0.9	1.8	
95	13a層	20J-10b	Fl	○	1.9	5.0	0.7	11.8	
96	13a層	20J-10b	Fl	○	3.6	4.2	0.7	10.0	
97	13a層	20J-10d	Fl	○	3.0	4.9	1.1	16.3	
98	13a層	20J-10d	Fl	○	2.7	3.0	1.0	8.3	

番号	遺構・層位	グリッド	器種	原 礎 面	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
99	13a層	11-1i	PS		2.0	4.3	1.2	8.1	
100	13a層	1J-1b	PS		2.2	3.1	0.4	4.1	
101	13a層	1J-1c	PS	○	1.7	4.7	1.4	10.8	
102	13a層	1J-2a	PS	○	1.5	5.7	0.9	4.4	
103	13a層	1J-2b	PS		3.7	3.7	1.5	23.4	
104	13a層	1J-3a	PS		3.2	4.0	1.3	17.8	
105	13a層	1J-3c	PS	○	2.4	3.4	0.5	5.8	
106	13a層	1J-3c	PS		2.8	4.3	1.2	12.1	
107	13a層	20J-10a	PS	○	3.6	5.1	2.1	41.8	
108	13a層	20J-10c	PS	○	3.7	4.4	1.4	25.1	
109	13a層	1J-2a	PS	○	2.7	5.4	0.7	15.8	
110	13a層	1I-1i	RF		3.3	5.2	0.5	9.0	
111	13a層	1J-3a	RF	○	1.6	3.2	0.3	2.1	
112	13a層	1J-1c	RF	○	2.1	3.3	0.6	4.1	
113	13a層	1I-1i	Sc		3.0	3.7	0.6	8.1	
114	13a-1層	1I-1h	Co	○	2.7	5.1	0.8	14.1	
115	13a-1層	1I-2h	Co	○	1.6	3.3	0.8	6.0	
116	13a-1層	1I-2j	Co	○	2.9	3.8	0.7	8.0	
117	13a-1層	1I-3g	Co	○	1.9	4.4	1.1	13.6	
118	13a-1層	20I-10h	Co	○	3.6	5.9	1.6	22.0	
119	13a-1層	1I-2j	Co		2.9	2.9	0.8	5.4	
120	13a-1層	1I-2j	Co	○	1.7	2.1	0.3	0.9	
121	13a-1層	1I-1g	Fl	○	2.5	4.0	0.8	10.0	
122	13a-1層	1I-1h	Fl		1.8	1.9	0.2	0.9	
123	13a-1層	1I-1i	Fl		1.8	2.4	0.7	2.3	
124	13a-1層	1I-1i	Fl		1.9	2.5	0.4	1.9	
125	13a-1層	1I-1i	Fl	○	3.3	3.8	0.7	13.1	
126	13a-1層	1I-1i	Fl	○	5.0	7.5	1.7	56.5	
127	13a-1層	1I-2h	Fl	○	1.7	3.4	0.3	1.5	
128	13a-1層	1I-2i	Fl		3.1	2.1	0.6	2.9	
129	13a-1層	1I-2j	Fl		1.9	2.7	0.4	1.5	
130	13a-1層	1I-2j	Fl	○	2.6	4.4	0.4	6.4	
131	13a-1層	1I-2j	Fl	○	2.4	3.1	0.9	6.2	
132	13a-1層	1I-2j	Fl	○	2.5	3.2	1.1	7.0	
133	13a-1層	1I-3i	Fl		2.7	4.0	1.0	8.2	
134	13a-1層	1I-4h	Fl	○	2.1	5.8	0.7	5.8	
135	13a-1層	1I-4h	Fl	○	2.2	2.4	0.4	1.3	
136	13a-1層	1I-4j	Fl	○	2.1	2.3	0.7	2.4	
137	13a-1層	1I-1i	PS		2.9	4.5	0.5	8.6	
138	13a-1層	1I-2h	PS	○	1.6	5.4	1.4	17.5	
139	13a-1層	1I-2i	PS	○	3.9	4.9	1.1	23.6	
140	13a-1層	1I-2i	PS	○	3.6	5.3	1.2	22.6	
141	13a-1層	1I-2i	PS	○	2.9	4.1	1.4	2.0	
142	13a-1層	1I-4i	PS		1.6	3.7	0.9	4.8	
143	13a-1層	1I-1i	PS	○	1.4	2.7	0.6	2.8	
144	13a-1層	1I-2j	PS	○	2.4	3.4	0.4	6.0	
145	13a-1層	1I-3h	PS		3.2	3.2	0.8	7.9	
146	13a-2層	1I-1g	Fl	○	3.5	4.1	0.4	6.3	
147	13a-2層	1I-1g	Fl	○	2.9	4.7	0.7	8.4	
148	13a-2層	1I-1g	Fl	○	3.1	4.0	0.9	6.9	
149	13a-2層	1I-1g	—	○	1.8	4.7	1.1	11.3	原礎
150	13a-2層	1I-1g	Fl	○	2.2	2.2	0.7	4.5	
151	13a-2層	1I-2i	Fl	○	2.3	4.0	0.6	6.2	
152	13a-2層	1I-2i	Fl	○	3.1	3.8	0.7	11.8	
153	13a-2層	1I-2j	Fl	○	3.2	4.2	1.2	16.2	
154	13a-2層	20I-10h	Fl	○	2.8	3.1	0.4	3.8	
155	13a-2層	1I-1i	PS	○	4.9	5.7	1.3	49.2	
156	13a-2層	1I-2h	PS	○	2.4	5.1	0.9	18.4	
157	13a-2層	1I-2i	PS		2.3	5.7	1.2	17.6	
158	13a-2層	1I-2j	PS	○	3.6	5.3	0.8	11.5	
159	13a-2層	20I-10h	PS	○	1.9	5.2	0.9	11.0	
160	13a-2層	1I-1j	PS		2.9	4.5	0.9	16.6	
161	13a-2層	1I-2j	RF		3.3	3.4	0.5	6.5	
162	13a-2層	1I-1g	RF	○	3.1	4.9	0.8	10.4	
163	13a-2層	1I-1h	Sc	○	3.1	3.9	1.7	10.8	
164	13a-2層	20I-10i	RF	○	5.2	6.8	1.7	48.9	
165	13a層下面	1I-1j	Co		2.9	3.3	0.8	5.9	
166	13a層下面	1I-3j	Co	○	2.4	2.7	1.3	6.9	
167	13a層下面	1J-1b	Co		2.6	3.3	1.1	10.4	
168	13a層下面	20I-10h	Fl	○	1.8	2.8	0.4	1.5	
169	13a層下面	1I-2j	Fl		2.4	2.9	0.4	3.5	
170	13a層下面	1I-3h	Fl		1.3	1.9	0.2	0.7	
171	13a層下面	1I-3i	Fl		2.7	2.8	0.6	2.3	
172	13a層下面	1I-3j	Fl		1.8	3.1	0.4	2.3	
173	13a層下面	1I-3j	Fl	○	2.7	2.9	0.5	5.3	
174	13a層下面	20J-10c	Fl	○	2.0	3.7	0.9	5.2	
175	13a層下面	1J-3d	RF		3.1	3.4	0.4	5.0	
176	13a層下面	20I-10h	RF	○	3.0	3.7	0.6	5.2	
177	23溝	1I-2h	Co	○	2.8	3.3	0.8	10.1	32と接合
178	23溝	1I-2h	Fl	○	1.4	2.2	0.2	0.7	

番号	遺構・層位	グリッド	器種	原 礎 面	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
179	23溝	1I-2h	Fl		2.2	2.8	0.3	2.8	
180	23溝	1I-2j	Fl	○	4.9	5.2	1.9	56.0	
181	23溝	1I-3j	Fl	○	2.3	3.0	0.5	3.5	
182	23溝	1J-3d	Fl	○	2.1	3.6	0.4	2.6	
183	23溝	1I-2i	PS	○	3.3	4.2	0.5	9.2	
184	23溝	1I-2h	RF		1.7	2.5	0.6	2.3	
185	23溝	1I-2h	RF	○	4.4	4.7	0.8	21.0	
186	50溝	1J-3b	Co	○	1.8	4.5	0.8	11.2	
187	50溝	1I-2j	Fl		1.4	3.1	0.4	1.6	
188	50溝	1I-2j	Fl	○	4.5	4.8	0.9	15.6	
189	50溝	1J-3a	Fl	○	2.7	3.3	0.3	3.0	
190	50溝	1J-3b	RF		2.5	3.2	0.4	4.1	
191	80溝	1I-1g	Co		2.1	2.7	0.7	4.8	
192	80溝	1J-3d	Co		5.1	5.9	1.8	61.5	
193	80溝	1I-2h	Co	○	2.5	3.6	1.3	11.8	
194	80溝	1I-2h	Co	○	2.1	4.5	1.2	14.2	
195	80溝	1I-3j	Co		3.2	3.6	0.9	11.6	
196	80溝	1I-2g	Fl		1.4	1.8	0.2	0.8	
197	80溝	1I-2g	Fl	○	2.9	4.0	0.6	7.8	
198	80溝	1I-2h	Fl	○	3.8	6.0	1.4	28.4	
199	80溝	1I-2i	Fl		1.9	2.9	0.3	2.9	
200	80溝	1I-2j	Fl		3.3	4.0	0.7	9.9	
201	80溝	1I-2j	Fl	○	2.1	3.7	0.7	7.4	
202	80溝	1I-2j	Fl		2.4	3.3	0.5	5.5	
203	80溝	1I-3j	Fl	○	3.0	3.4	0.8	10.8	
204	80溝	1I-3j	Fl	○	3.3	3.6	1.1	11.1	
205	80溝	1J-3a	Fl	○	2.7	4.5	0.8	10.7	
206	80溝	1J-3a	Fl	○	2.3	3.6	1.1	7.0	
207	80溝	1J-3a	Fl		2.4	3.3	0.4	3.8	
208	80溝	1J-3a	Fl	○	2.3	3.5	0.5	4.8	
209	80溝	1I-2i	Fl		0.9	1.1	0.2	0.2	
210	80溝	1I-2g	PS	○	2.5	3.3	0.5	5.4	
211	80溝	1I-2g	PS	○	3.6	4.5	0.7	11.4	
212	80溝	1I-2h	PS		3.1	4.9	2.3	42.0	
213	80溝	1I-3j	PS		1.5	5.0	0.9	5.8	
214	80溝	1I-2h	RF	○	3.8	7.2	1.1	25.2	
215	80溝	1I-2g	RF?		1.7	2.1	0.3	1.1	
216	100溝	1J-3a	Fl		1.8	4.5	0.8	2.4	
217	100溝	1J-3a	Fl		1.9	2.8	0.3	1.7	
218	100溝	1J-3a	Fl	○	1.7	2.3	0.3	1.3	
219	100溝	1J-3a	PS		2.4	3.6	0.5	6.7	
220	151溝	1I-4h	RF		1.7	2.4	0.2	0.8	
221	151溝	1I-4i	RF	○	2.9	4.2	0.6	7.0	
222	153溝	1I-3h	Fl	○	2.3	3.2	0.5	2.2	新欠面で接合
223	153溝	1I-3h	Fl	○	2.0	2.9	0.6	2.6	
224	197溝	1I-1h	PS	○	1.6	5.1	0.8	8.5	
225	198溝	1I-1h	Co	○	3.4	4.2	0.9	12.9	
226	150周溝	1I-2g	—	○	4.4	5.2	1.4	28.3	原礎
227	150周溝	1I-3h	Fl	○	1.6	2.9	0.5	2.4	
228	150周溝	1I-4g	Fl	○	2.1	2.4	0.3	2.1	
229	150周溝	1I-3h	PS	○	2.3	3.0	0.7	5.4	
230	150周溝	1I-3h	PS?		2.3	3.1	0.7	4.8	
231	127土坑	1J-2a	Fl		2.3	3.2	0.4	2.9	
232	156土坑	1I-3j	Fl		1.7	2.8	0.3	1.5	
233	225土坑	20I-10g	Fl	○	2.3	2.7	0.5	2.2	
234	225土坑	20I-10g	PS	○	2.0	3.5	0.4	3.6	
235	25落込	1J-1b	Fl	○	3.3	5.2	1.1	16.5	
236	49落込	20J-10c	Co	○	3.3	5.3	1.0	16.7	
237	200落込	1I-1g	Co	○	2.6	3.4	1.1	11.3	
238	200落込	1I-1g	Co	○	3.7	5.2	1.1	14.5	
239	200落込	1I-1h	Fl	○	1.4	2.2	0.4	1.4	
240	200落込	1I-1i	Fl	○	1.5	1.7	0.6	1.8	
241	200落込	1I-1j	Fl		1.5	2.5	0.2	0.8	
242	200落込	1I-1h	PS	○	2.9	4.0	0.9	10.6	
243	200落込	1I-1g	RF	○	3.1	5.6	0.6	11.7	
244	208落込	20I-10i	PS		2.4	3.2	0.7	7.6	
245	222落込	1I-1g	Fl	○	2.4	2.6	0.4	4.2	
246	222落込	1I-1g	Fl	○	3.6	5.5	1.4	20.3	
247	222落込	1I-1g	Fl		3.6	5.6	0.7	14.6	
248	222落込	1I-1g	RF		3.1	5.3	0.8		

写真図版



調査地上空から東方に連なる生駒山地を望む〔北半部調査中〕



1. 南半3層下面検出遺構〔南西から〕



2



4



3



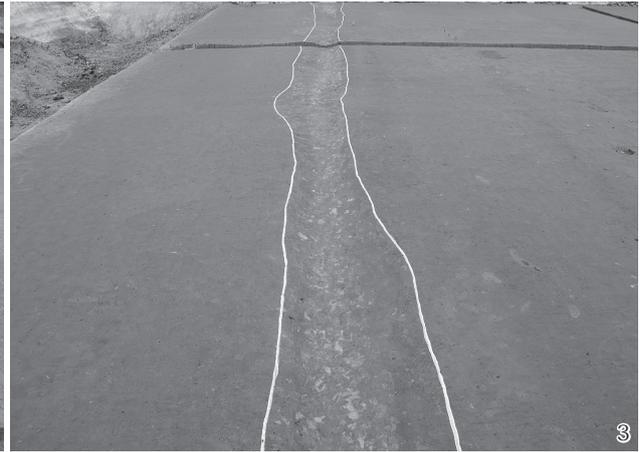
5

2. 北半3層下面検出遺構

3. 北半4層下面検出2溝延長部の砂層

4. 北半6層下面検出砂の盛り上がり

5. 南半7層下面検出砂層の広がり



1. 南半8層下面検出4溝と出土した卒塔婆(42)
2. 鏡(38)出土状況

3. 北半8層下面検出4溝
4. 4溝断面(南半部北端)



5. 南半9層下面検出遺構〔南西から〕



1



3



2



4

1. 北半9層下面検出遺構

2. 南半9層下面6畦畔検出状況

3. 北半9層下面147畦畔検出状況

4. 6畦畔断面



5

5. 南半10層下面検出遺構〔南西から〕



1. 北半 10・11 層下面検出遺構〔北西から〕



2. 北半 11 層下面検出 22 畦畔と 148・246 畦畔接続部〔北東から〕



1. 南半 10 層下面 22 畦畔と 19 畦畔接続部検出状況
2. 南半 10 層下面 19 畦畔検出状況

3. 北半 10 層下面 22 畦畔と 147 畦畔接続部検出状況
4. 北半 10 層下面 22 畦畔と 148 畦畔接続部検出状況



5. 北半 10 層下面 22 畦畔検出状況
6. 149 畦畔断面

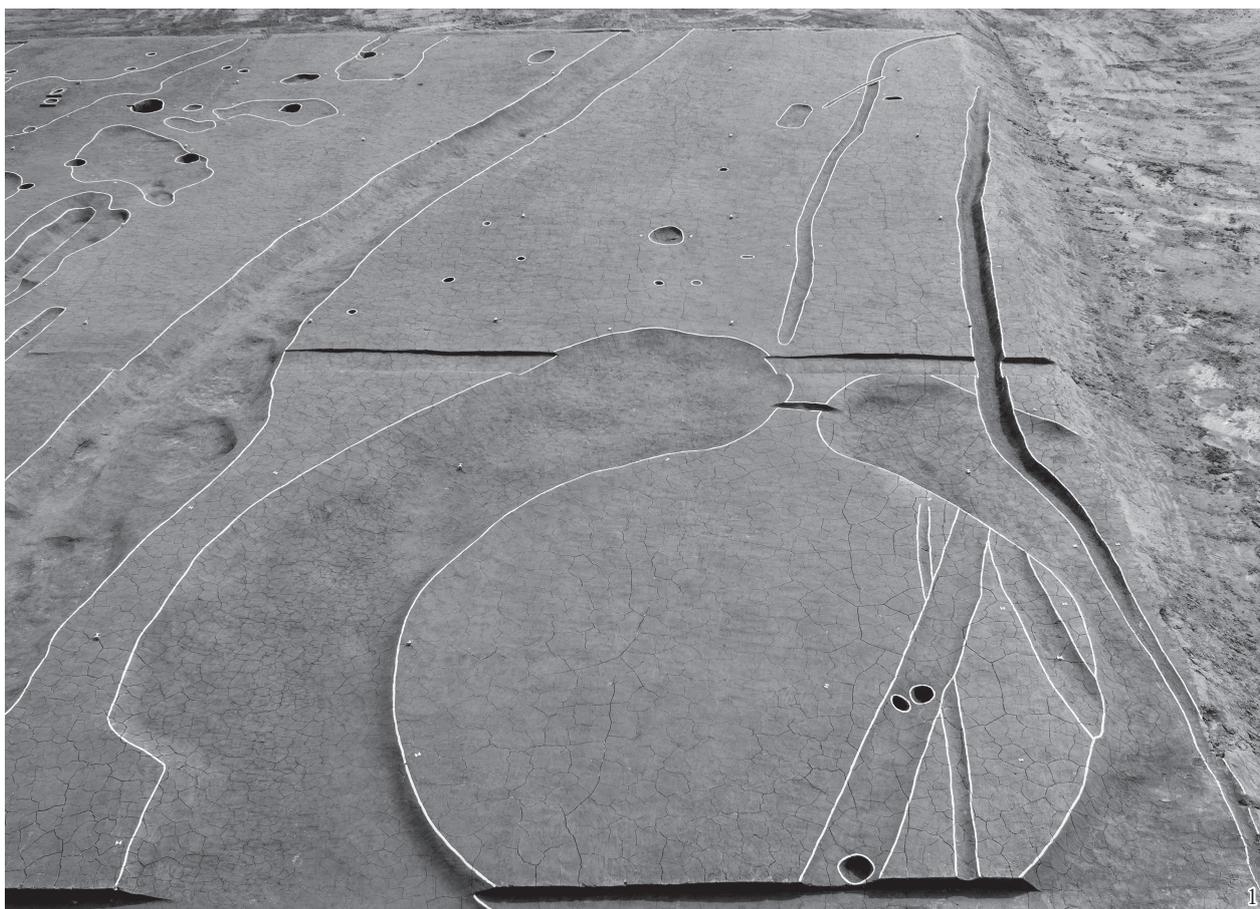
7. 南半 12 層下面 23 溝検出状況
8. 銭貨 (172) 出土状況
9. 銭貨 (174) 出土状況



1. 南半13層下面検出遺構〔南西から〕



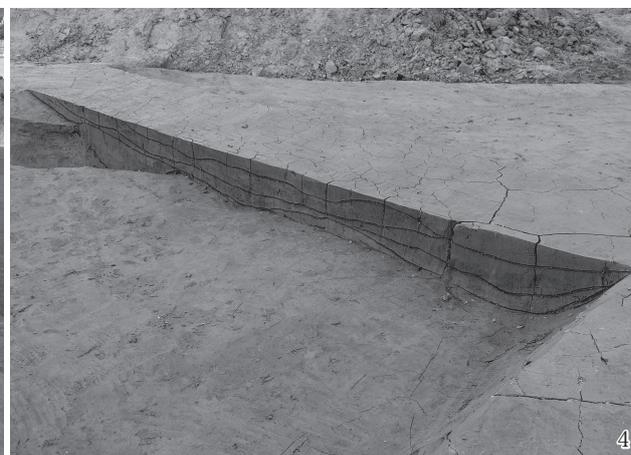
2. 北半13層下面検出遺構〔北から〕



1. 北半 13 層下面検出遺構（手前は周溝墓 10-1）〔北から〕



2. 周溝墓 10-1 検出状況



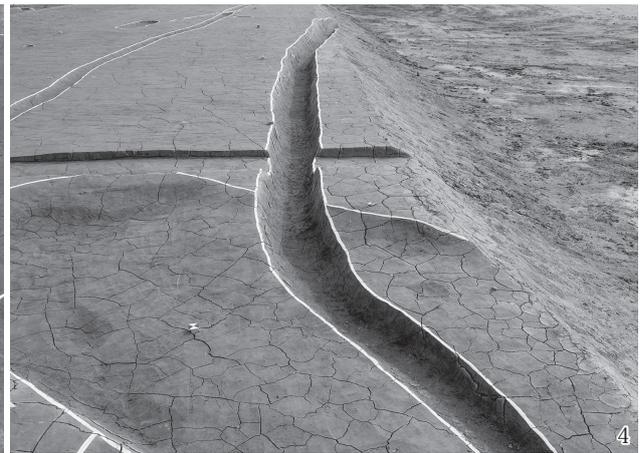
4. 150 周溝断面（南西部）



3. 150 周溝断面（南東部）と土師器（354）出土状況

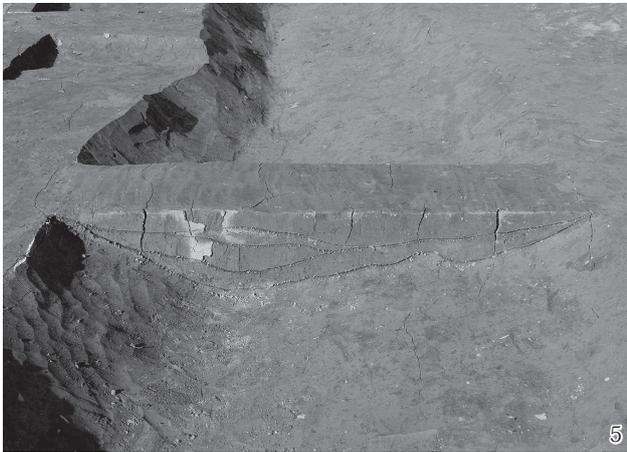


5. 150 周溝弥生土器（350）出土状況



1. 200 落込
2. 200 落込と 224 土坑

3. 202 落込と 212・229・231 土坑
4. 151 溝



5. 80 溝断面 (南半)
6. 80 溝断面 (北半)

7. 89 土坑
8. 90 土坑



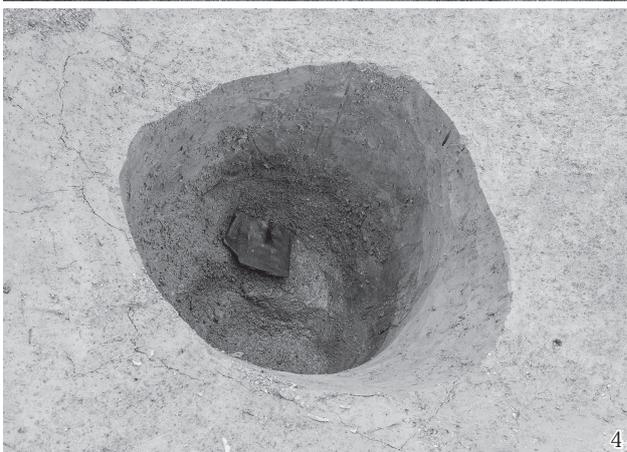
1



3



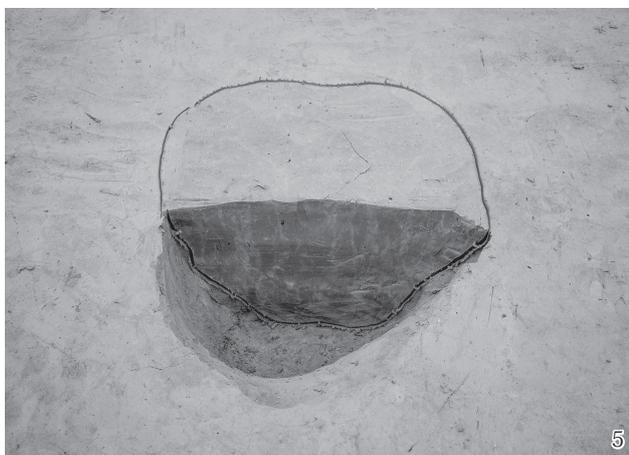
2



4

1. 126 土坑
2. 127 土坑

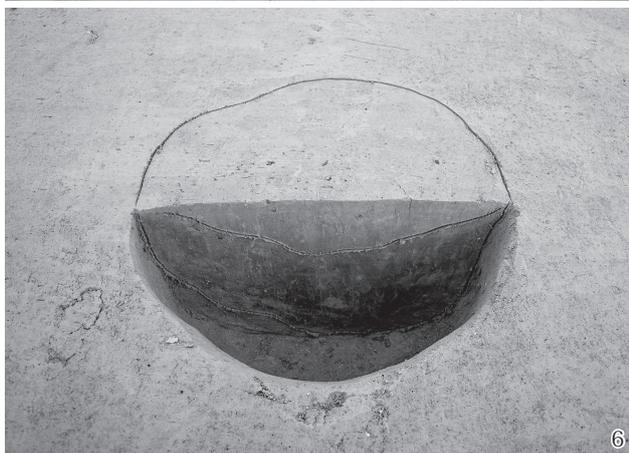
3. 130 土坑
4. 229 土坑



5



7



6



8

5. 48 ピット
6. 248 ピット

7. 南半 50 溝付近の砂層の落込み
8. 北半 14 層中の砂層



1



3



2



4

1. 152 溝石庖丁 (405) 出土狀況
2. 202 落込肩部縄文土器 (457) 出土狀況

3. 13a 層弥生土器 (252) 出土狀況
4. 13a-1 層石斧 (301) 出土狀況



5



7



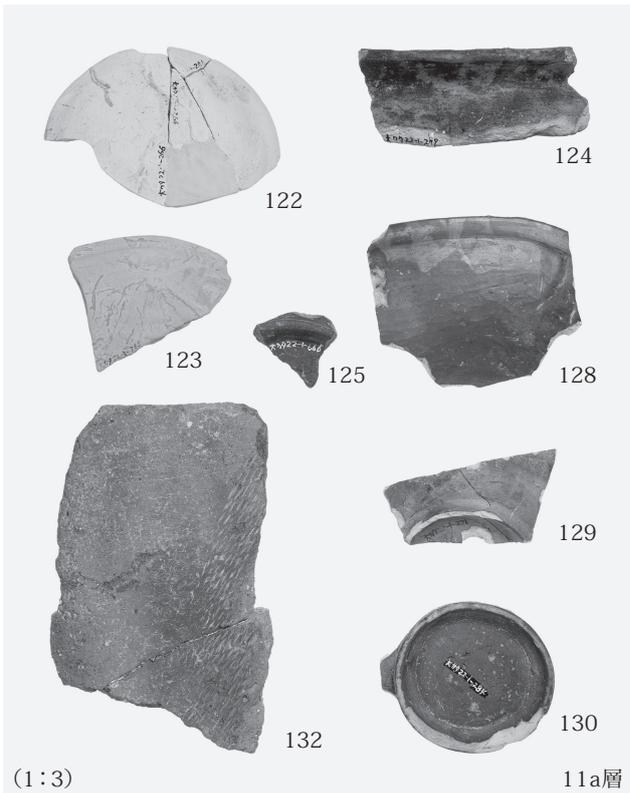
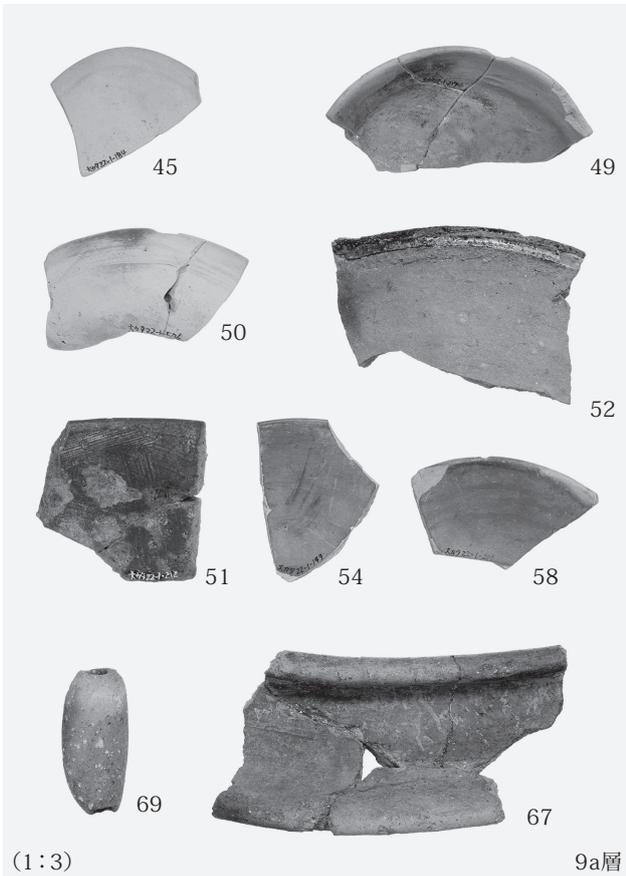
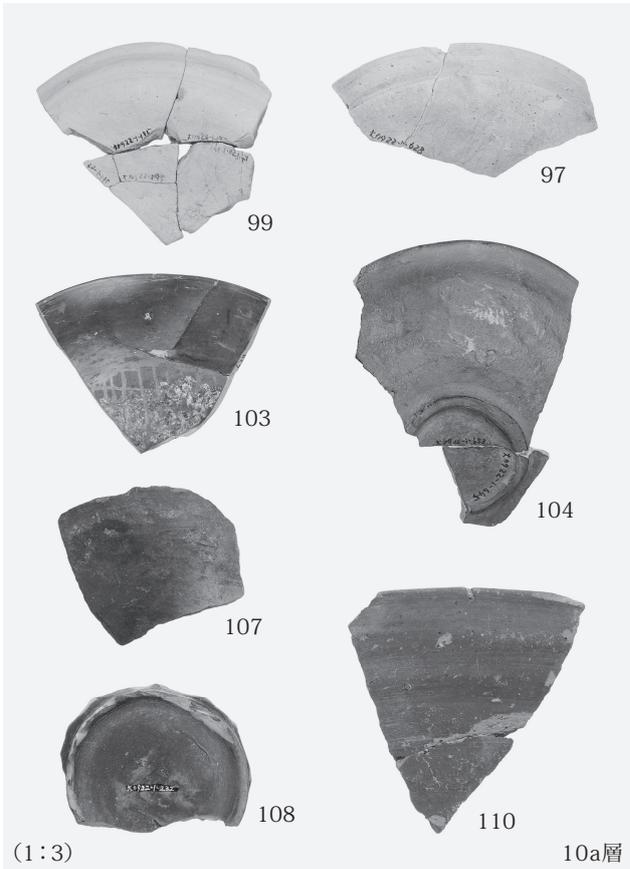
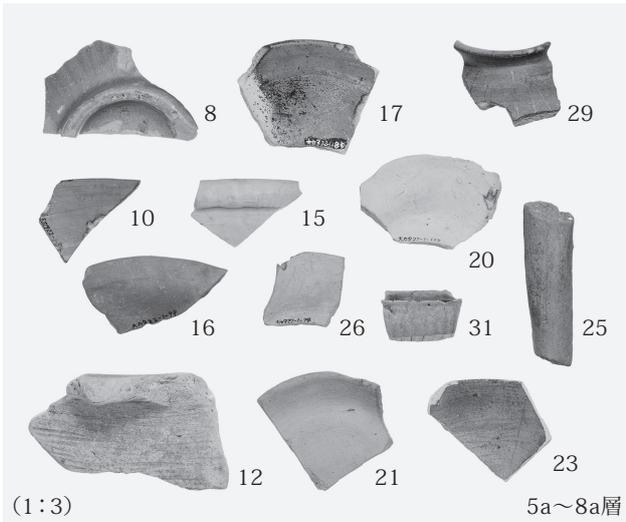
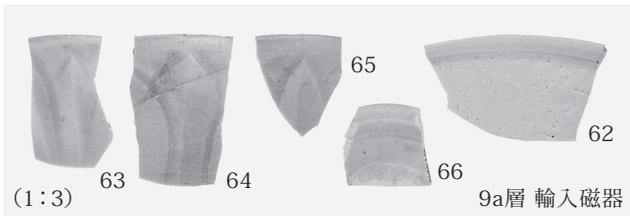
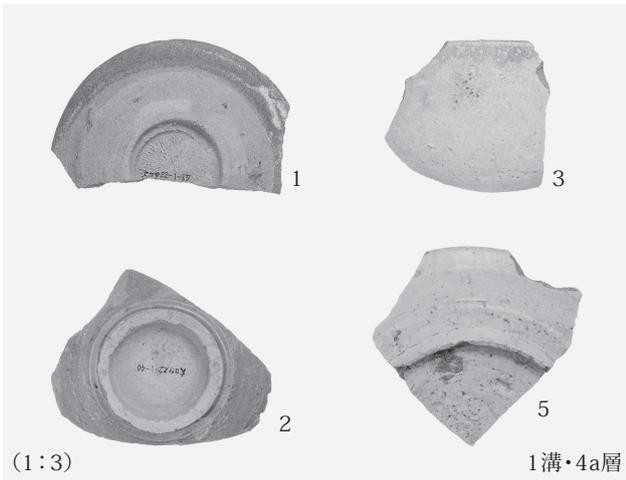
6

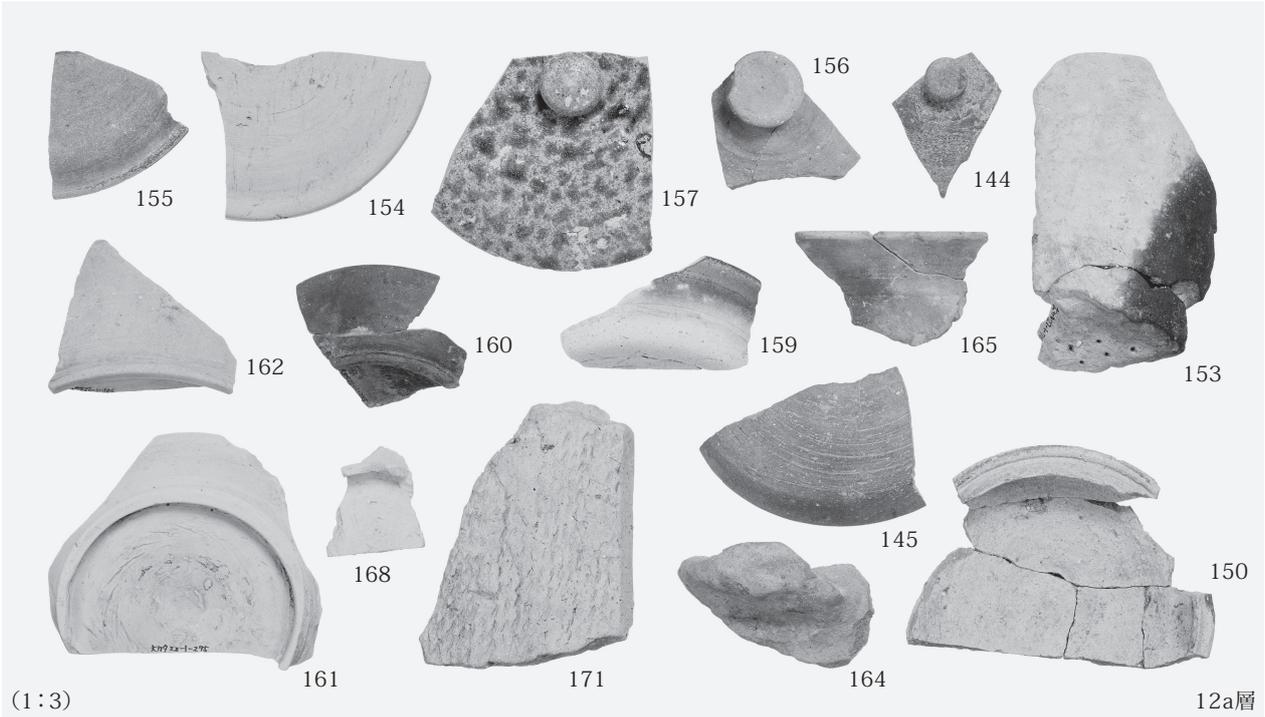


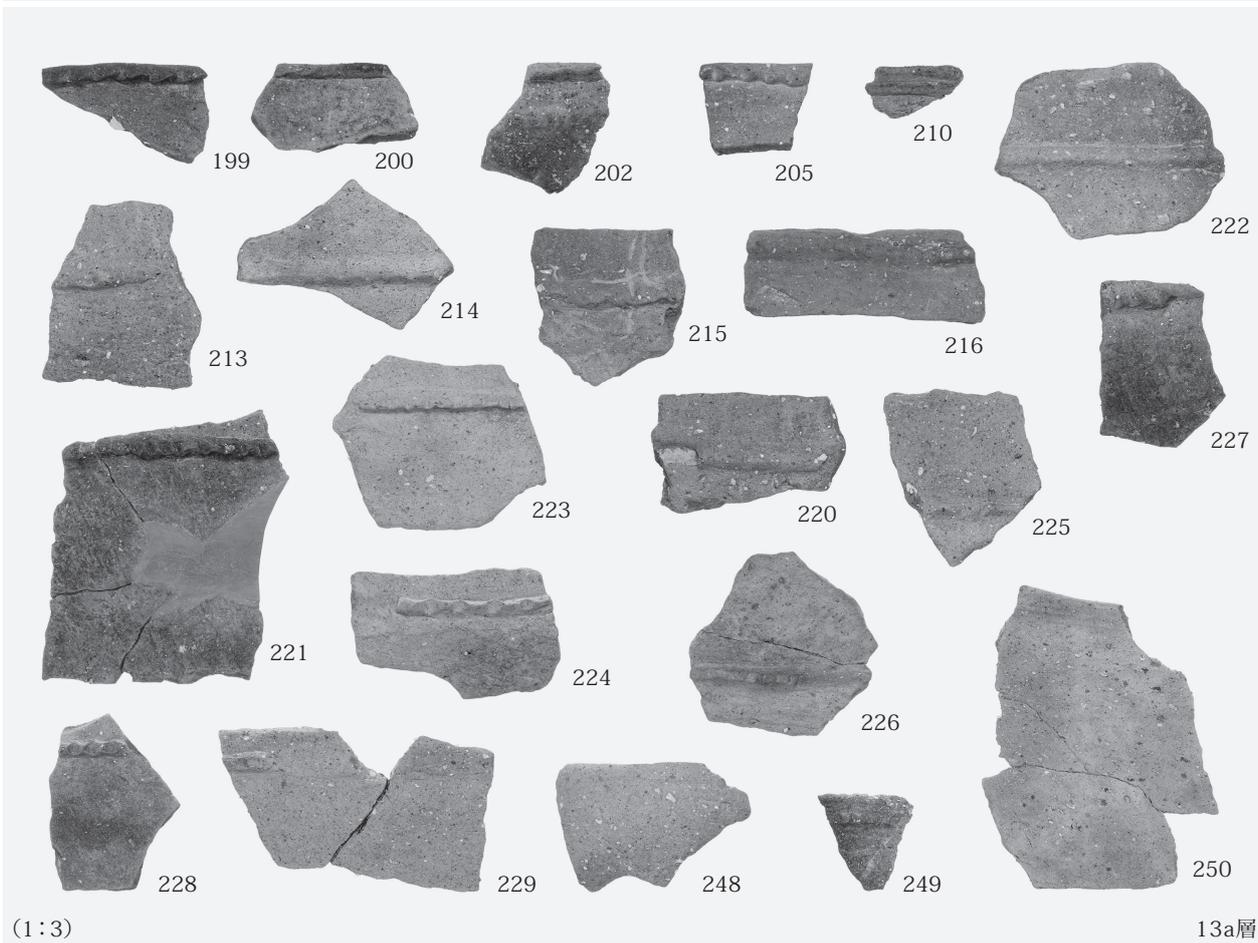
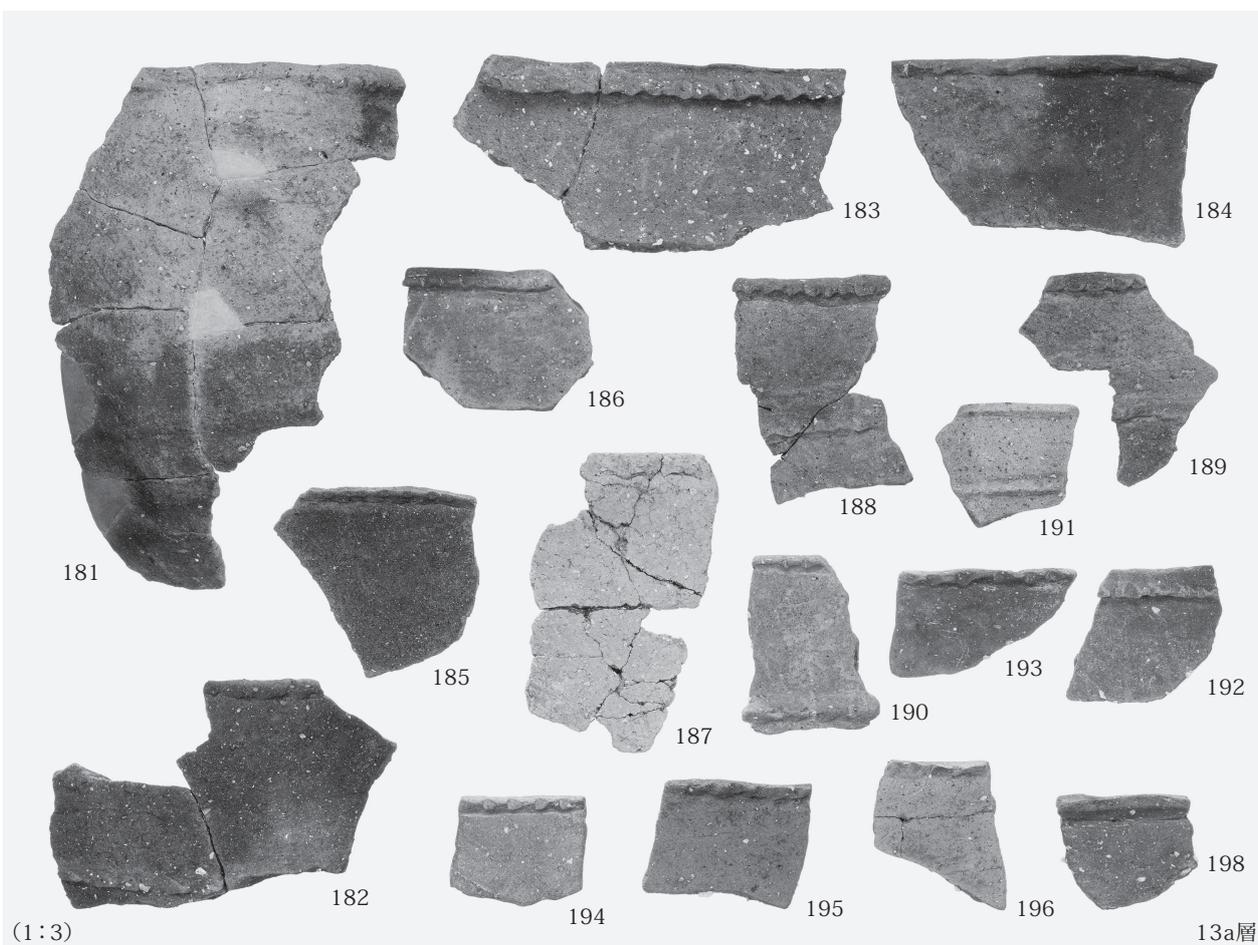
8

5. 13a-2 層下面石棒 (334) 出土狀況
6. 13a-2 層下面縄文土器 (341) 出土狀況

7. 14 層縄文土器 (472) 出土狀況
8. 14 層縄文土器 (473) 出土狀況









261



262



289



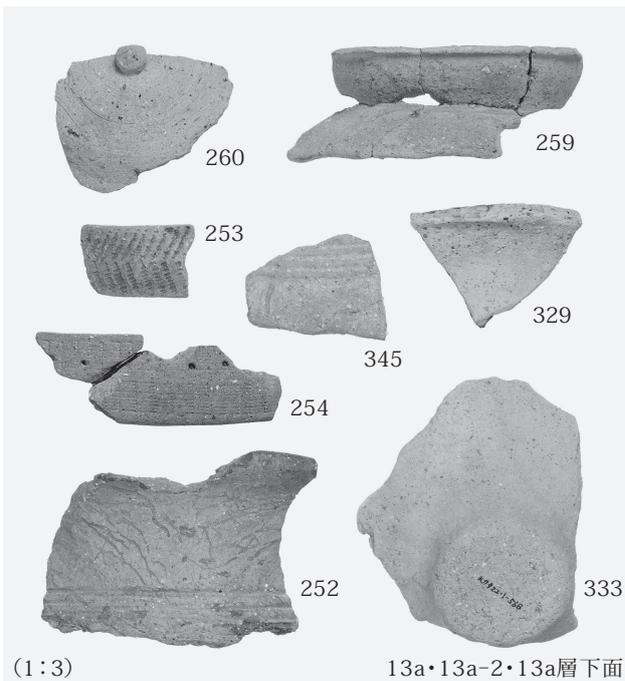
292

291

13a-1層



354



260

259

253

329

345

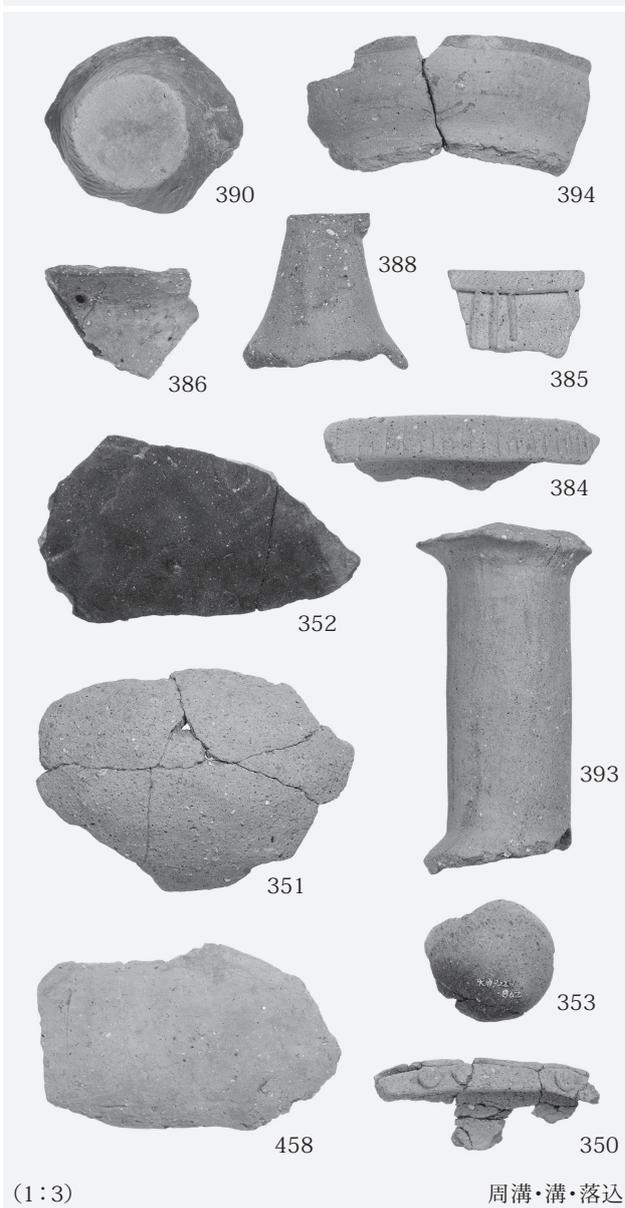
254

252

333

(1:3)

13a・13a-2・13a層下面



390

394

388

386

385

384

352

393

351

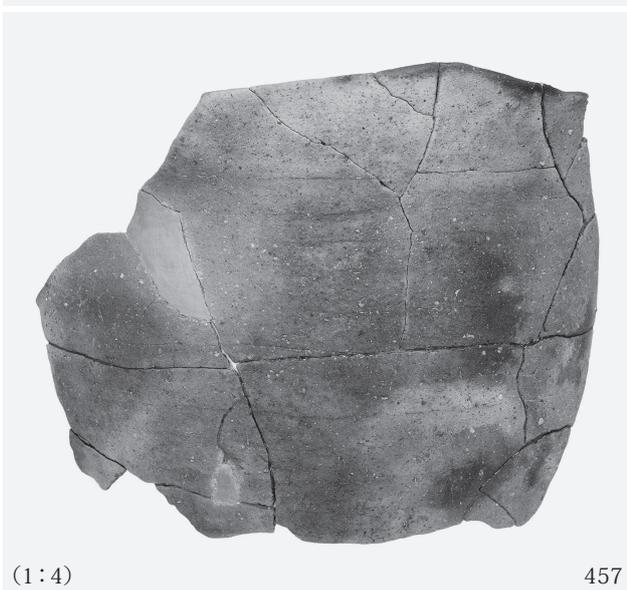
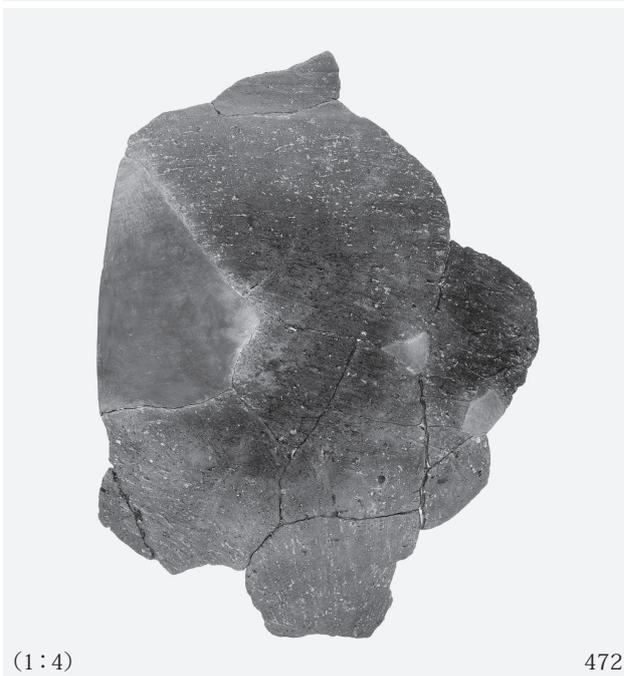
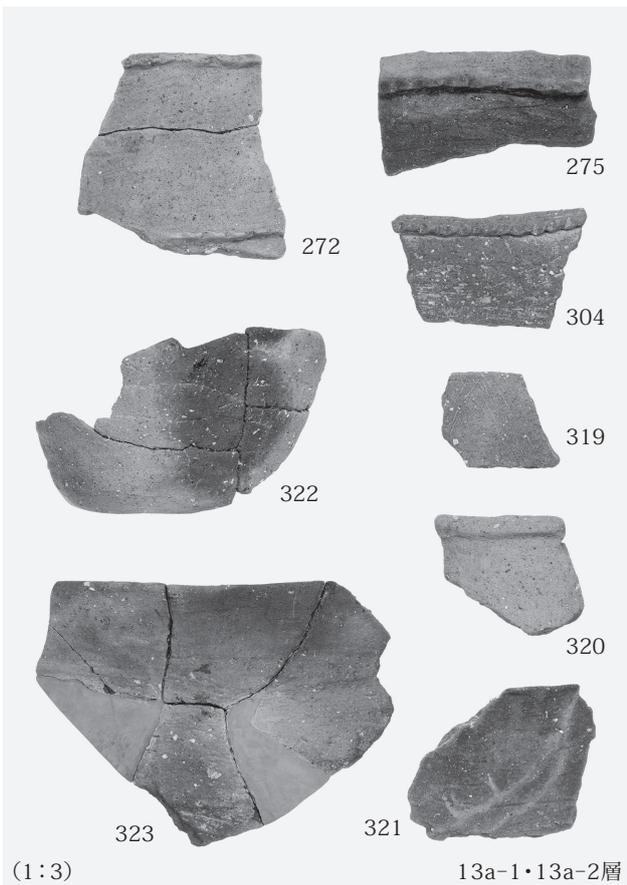
353

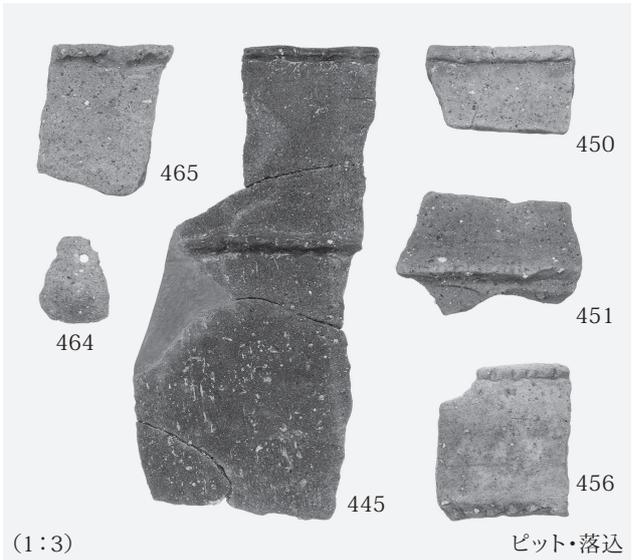
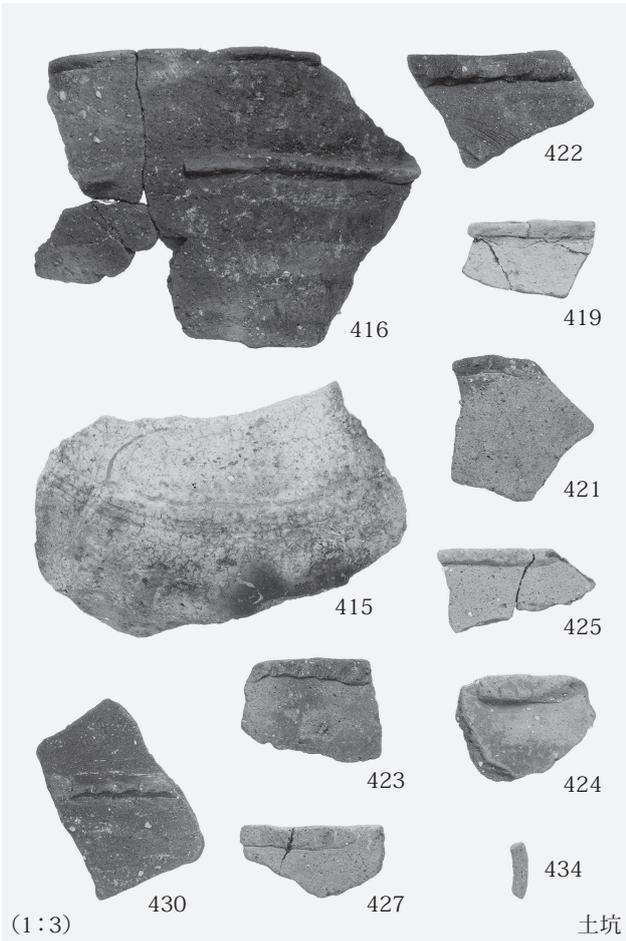
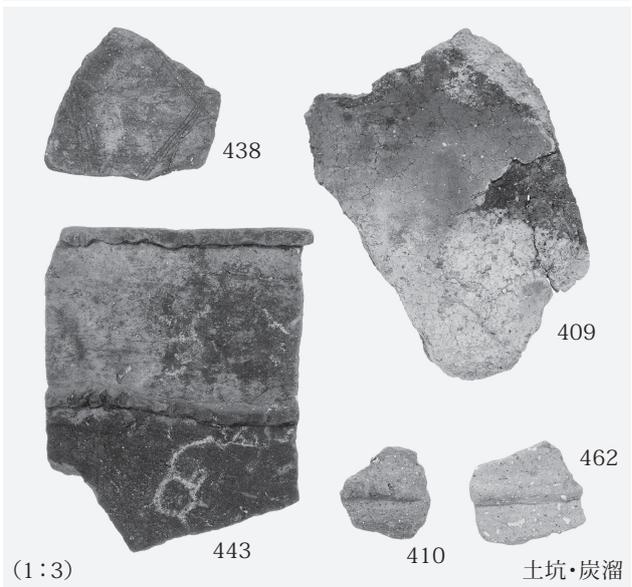
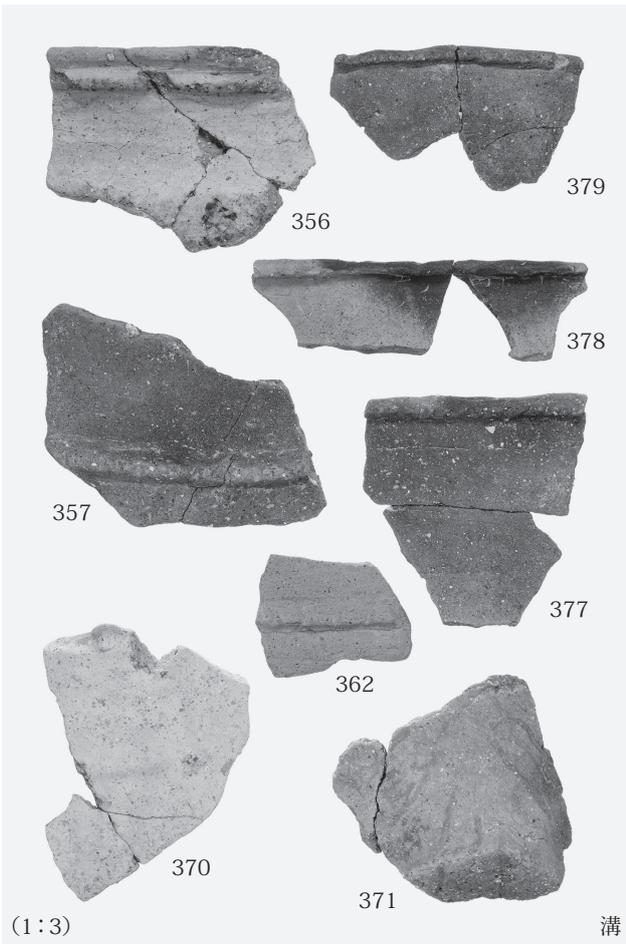
458

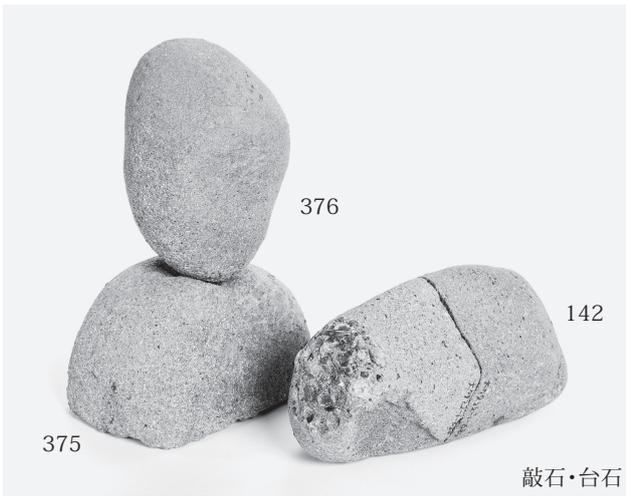
350

(1:3)

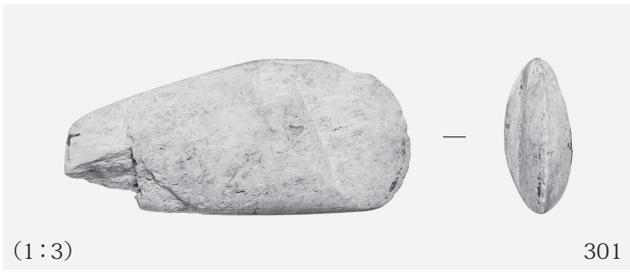
周溝・溝・落込







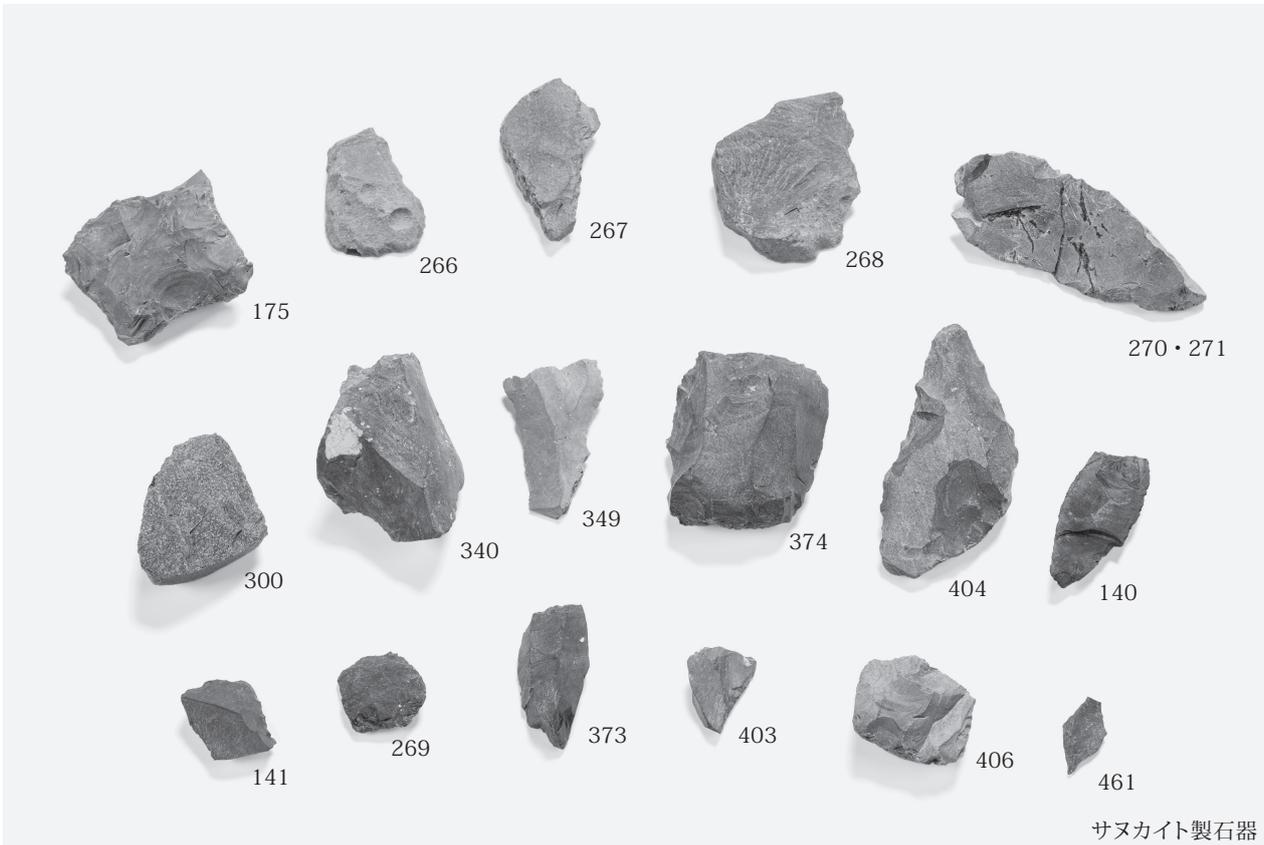
敲石・台石



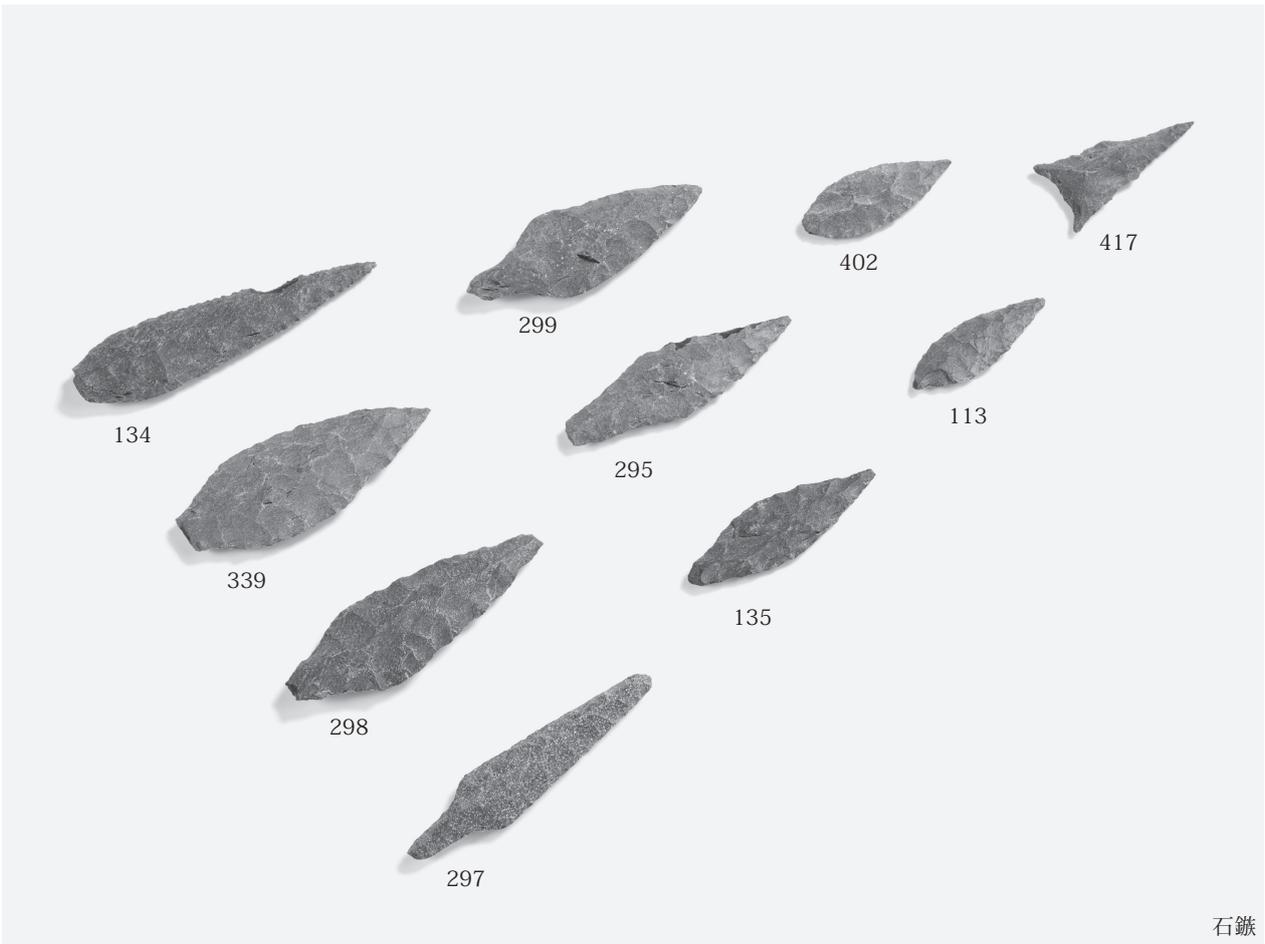
砥石



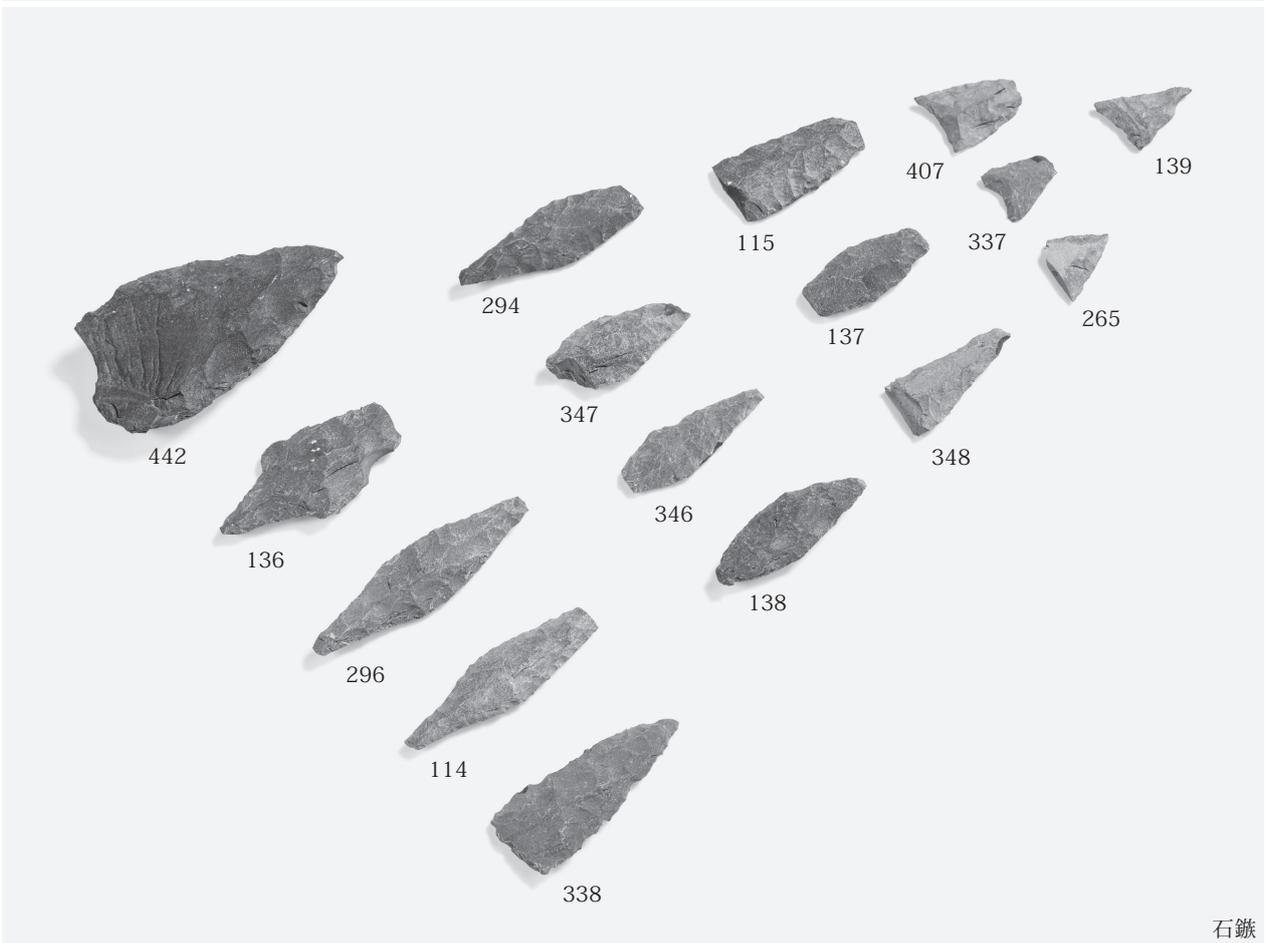
石庖丁



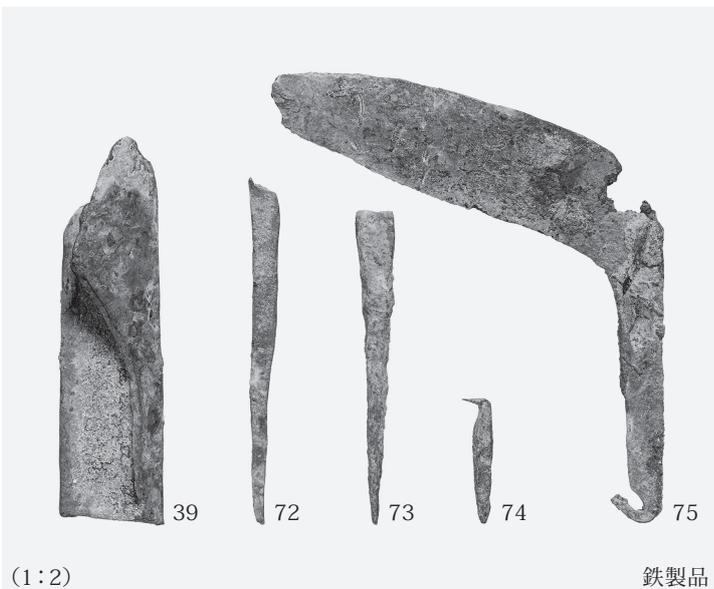
サヌカイト製石器



石鏃



石鏃



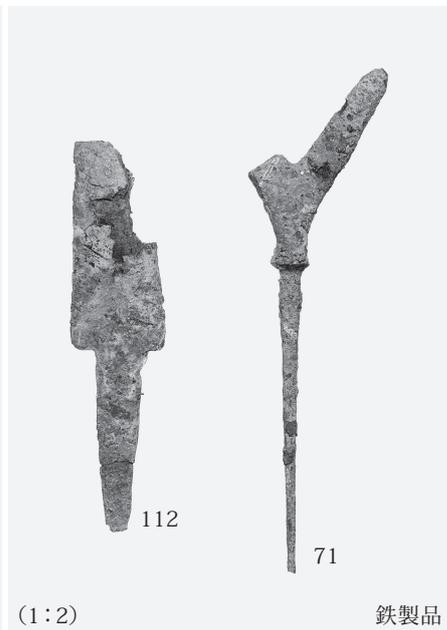
(1:2)

鉄製品



(1:1)

銭貨



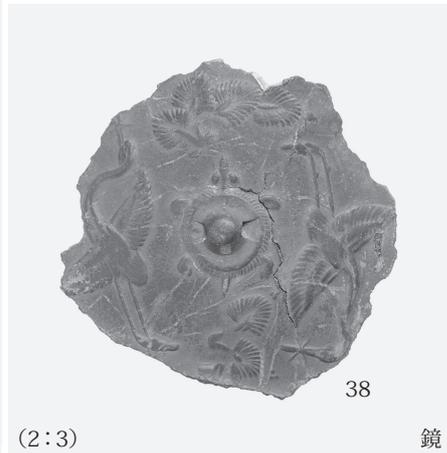
(1:2)

鉄製品



(1:2)

銅鏃



(2:3)

鏡



(1:7)

卒塔婆

報告書抄録

ふりがな	おおがたぐんじょうりいせき 10・やまのいいせき 4						
書名	大県郡条里遺跡 10・山ノ井遺跡 4						
副書名	寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 327 集						
編著者名	伊藤 武 田中秀弥						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590-0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2024 年 1 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
おおがたぐんじょうりいせき 大県郡条里遺跡	おおさかふかしわらし 大阪府柏原市 ほうぜんじ 法善寺	27221	69	34° 35' 49" 135° 37' 39"	2022.07.01 ～ 2023.04.30	2,970	寝屋川水系 改良事業 (一級河川 恩智川法善寺 多目的遊水地)
			86	34° 35' 57" 135° 37' 54"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
大県郡条里遺跡	集落 墓	縄文時代 ～ 古墳時代	土坑、落込み ピット、溝	縄文土器、弥生土器、土師器、 須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質 土器、国産陶器、輸入磁器、瓦、 石製品（石棒・石斧・石庖丁・ 砥石・敲石・剥片・楔形石器・ スクレイパーなど）		円形周溝墓を 1 基検出	
山ノ井遺跡	田畑	古代～ 中世	円形周溝墓 畦畔、島畠 等	木製品（卒塔婆・容器底など） 金属製品（銭貨・鏡・鉄鏃・鎌・ 釘・銅鏃など） 土製品（土偶・土錘など）		縄文時代晩期末の凸帯文 土器が多数出土	
要約	<ul style="list-style-type: none"> これまでの調査同様、条里型地割の痕跡＝畦畔・溝を検出した。もっとも古い段階の痕跡は、10 世紀頃のものと考えられる。 弥生時代後期後半の周溝墓を 1 基検出した。（その 8）・（その 9）調査と合わせ 4 基が列状に並ぶ。これまでの 3 基はいずれも方形周溝墓であったが、今回の周溝墓のみ円形周溝墓である。ただし、出土遺物や規模からは、この周溝墓のみの特異性を見出せない。また、墓域の東側を画してたと考えられる溝も検出している。 調査区の東半で、土坑や落込み・ピットなど縄文時代の遺構を検出した。今回の調査区は、山ノ井遺跡側を中心とする集落の縁辺部にあたっていると考えられる。出土遺物も多く、土器や石器のほか、縄文時代に特有の土偶や石棒も出土している。 						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 327 集

大県郡条里遺跡 10・山ノ井遺跡 4

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2024 年 1 月 31 日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本 / 株式会社 明 新 社
奈良市南京終町 3 丁目 464 番地